
Nympholic amon

花街茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Nympholic amon

【Nコード】

N3946X

【作者名】

花街茂

【あらすじ】

大陸の三代列強のひとつベルディニオの公爵アモンは、没落貴族として辺境の古城に身を寄せていた。粗暴な従者と柔和な庭師、そして豊かな森に囲まれ、怠惰だが平和な日々を暮らす自堕落公爵の不思議な生活の記録。

プロローグ

その日はまるで霧のように細かな雨の降りしきる、体を芯まで湿らせるような不快極まる天気だった。

長らく辺境に閉じ込められていた公爵、アモン・ハイラッド・モルガンが公式には病死扱いで暗殺されてからちょうど一年が経過した日。

彼の最後の居城となったその場所に、皮製のローブを深く被った人影が立っている。

城門の前で立ち尽くすその人物は、ローブの上からわずかに見える姿形から女性であることがかるうじて分かった。

まるで濡れるに任せるようにただ雨の中、城門の先に見える荒れ果てた庭園を見つめ続けるローブの女性。

と、突然自分以外の人の気配を感じた彼女は、素早く後ろを振り返る。

瞬間、気配は声を発した。

「やはりこちらに来ていたんですね。テオドールさん」

背後から現れた人物は女性と同じく皮製のローブをまとい、雨に濡れた花束を片手に先客の女性の名をそう呼んだ。

新たに現れた人物の正体を知ってか、テオドールと呼ばれた女性は緊張を解いたように肩を落とすと、背を向ける格好になった城門にもたれかかり、静かに話し始めた。

「当然だろ？王家の墓なんぞは、私らなんかには近づくことも出来

ないからな」

「それでせめて城へと思ったわけですね」

「お互い、考えることはおんなじだったか」

話し始めは互いに穏やかだった。

知己との久方ぶりの出会いであつたせいもあつたろう。一時の気持ちには少なからず嬉しさに満ちていた。

だが、次の言葉を選ぶ過程で、テオドールは急に感情が高ぶり、自分の声が怒気を帯びるのを感じた。

「…お前は納得できたのか？」

言いながら、テオドールは後ろ足で城門の格子を手荒に蹴りつけた。

「あのバカ公爵の選んだ道が！」

耳障りな雨の音に鈍い金属音が混ざる。

「それがあの人の答えだつたんですよ。恐らくは最善の…最善と考えた答えだつたんです」

アルセイデスと呼ばれた人物はテオドールの横に立つと、持参した花束を城門の下に優しく置き、そのまま屈んだ姿勢で城門の先へ視線を向けると、言葉を続けた。

「せめて…庭を手入れできないのが、残念です」

「…あのバカの唯一の趣味だったからな」

相槌を打つようにテオドールが言葉を返すと、アルセイデスは苦笑しながら立ち上がり、雨の続く天を仰ぎ見ると、消え入るような声で呟いた。

「庭はいつか元通りにしますよ。だから安心してください」

自然と目から頬へと水滴が伝った。

霧のような雨のせいではない。

アルセイデスは自らの頬を流れるものを拭おうともせず、今は亡き主のことを思い返していた。

公爵と臥所

アモンはベッドの中で目を覚ましてから、すでにどれほど時間が経ったか分からなくなっていた。

起き上がるでもなくベッドの上で仰向けになりながら、顔にかかったうっとうしい自分の髪越しに古いが見事に手の込んだ装飾の施された天井を眺め、何とはなしに物思いにふけていると、まるで時の流れが止まったような錯覚を覚え、奇妙な浮遊感に包みこまれるように、それはそれでも心好く感じた。

ところで、

思えば今、自分はこうしているのだろうか。

体の倦怠感に反比例してすっかり覚醒した意識の中、現在の自分が置かれた立場を今一度考えてみる。

どのような世界にも権力に魅せられた人間達による政治抗争はあるもので、ここ北東の大国ベルディニオにも、今まさに利権を巡る狡猾な争いが展開されていた。

大陸の三大列強のひとつとして語られる王政国家ベルディニオは、前国王カムランの突然の病死によって即位した若き王ウェイディに甘い汁を狙って群がる家臣団や、新王を廃して民主の革命を画策する中央議会などの策略・謀略が駆け巡り、さながら目に見えぬ内戦が激化の一途を辿っていた。

そんな中、新王ウェイディの従兄弟にあたり、王位継承権第二位にあったモルガン公爵家の当主アモンは、自分の全く知らない間に反王勢力の旗印として担ぎ上げられるらしいというあまりに不明瞭な

噂により、それを恐れた家臣団の王への助言から領地と大半の財産を没収され、一夜にして王族でありながら没落貴族と成り果て、隣国のレムレス法王自治国との国境に近い、森に囲まれた古城での生活を強いられることになったのである。

己を現状に追い込んだ過去を少し腹立たしく感じつつも、不思議とアモンはさほど大きな感情の高ぶりに見舞われることは無かった。

それは生来政治欲が無く、権力に対する執着も無い彼の性格ゆえであろうか、それとも現国王に対する同情心によるものか、結果として彼は最期までその理由を理解できずに生を終えることとなるが、それはまだ先の話である。

そんな煩雑とした思考をベッドで巡らしているまさにその瞬間、突然寢室のドアが乱暴に開け放たれた。

「お目覚めですか、バカ公爵？」

ずかずかと寢室に押し入ってきた人物は窓際へ足早に向かうと、これまた乱暴にカーテンを開け放ちながら、かまびすしい声を上げた。見れば、はつとするような美女である。

肌の色こそ浅黒く、お世辞にも上等とは言えないメイド服を纏っではいたが、その顔立ちはそれらを差し引いても十分な釣りが投げ返されるほどの美貌を湛えていた。

「…テオドル、何度言ったら分かってくれる。私のことは殿下と言え。もしくはせめて公爵と呼べ。バカは余計だ」

ベッドの上から恨めしそうな視線を送りながら、アモンははつきりとした口調で従者を非難した。

「主人に繰り言をさせる従者など聞いたことが無いぞ。それとも何か、お前のその大きなお耳は飾りか何かか？」

アモンの言うように、テオドルの耳は確かに大きい…というより、

長い。

それは彼女の種族特有の身体的特徴である。

テオドールは黒エルフの蔑称で知られる「洞人」^{ほらびと}のひとりである。

洞人はその名の通り、洞穴などを好んで住居にするためについた名だが、亜人に対する差別の激しい昨今では、主に黒エルフという蔑称が用いられることがほとんどだ。

他に「森人」^{もりびと}の名で知られ、白エルフという蔑称を受ける種族も存在するが、同じエルフという名でくられた彼ら種族の間には、実際は何の接点も無い。

ただ、容姿が極めて良く似ているためにつけられたなんとも粗雑な差別的名称である。

とはいえ、実際両者を見分けるのはその肌の色をもつてする以外に無いほど類似しているのも事実であつた。

だが、厳密には両者は肌の色以上に大きな差異がある。

それは、

「眠り姫にでもなったおつもりか存じませんがね、今はもう昼をとつくに回ってるんです。いい加減で起きないつもりなら、次の朝まで深く眠らせて差し上げましょうか？」

この好戦的性格である。

言いながらベッドまで近づいていたテオドールは、ちょうどアモンの寝ている位置から拳ひとつ分離した場所を正拳で力いっぱい殴りつけた。

強烈な衝撃が波のように伝わり、アモンはまるで飛び跳ねるようにベッドの斜め上へと舞い上がり、即座に堅く冷たい床へ落下した。

没落貴族の哀れな末路と見ても、さすがに不憫な光景。

しかし、現実である。

信じがたいことに、これが昨今のアモン公爵が床を出る際の日常的風景であった。

主人と従者

ようやくにベッドから起きだしてきたアモンに、テオドールは投げつけるように上着を渡すと、さも面倒そうにベッドを整え始めた。

アモンはアモンで着替えを手伝う気はなから無い従者に向かつてぶつくさと文句を言いつつ、寝巻きの上から横着に上着を羽織ると、ベッド脇の小物入れから愛用の鼻眼鏡を取り出し、ちゃんと鼻の上に乗せる。

すると、まだ探し物があるといった様子で小物入れの中をちよろちよろとかき混ぜながら、

テオドールに声をかけた。

「おい、私の忘れ草はどこにいった？」

ベッドの整頓がちょうど終わったテオドールは、ふーっと大きなため息を吐くと、とても主人を見るとは思えない目でアモンを見やうて言う。

「お煙草でしたら、そっくりゴミとして捨てました」

一瞬、アモンは小物入れをひっくり返しそうになった。

そして、次の瞬間には最大級の怒りを込めた眼差しでテオドールを睨むと、腹の底から抉り出すような声で質問する。

「テオドール…、私は見ての通り極めて出来た人間だ。いかに理不尽と思える事柄でも、その理由が納得のいくものであるなら、むやみに感情を荒立てたりはしない。さて、その上で質問だ。何故に私の貴重な嗜好品を葬った？」

言い終わるや、露の間も空けずにテオドールの壮絶な反論が返ってきたとき、アモンは自分の質問が完全なヤブヘビであったことに気づいたが、もはやそれは遅すぎた。

「質問をお受けしたのでしつかりとお答えいたしましたしょうバカ公爵。貴方の無神経に振り回されるお煙草のおかげで、この城のあらゆる布製品は甚大な被害をこうむってきたのをよもやご承知でないはずはありませんよね。ベッドのシーツしかり、カーテンしかり、絨毯しかり、そして今、貴方が着ておられる上着は一体何着目だと思っておいでですかね」

鼻先にでもぶつかろうかという勢いで迫りながらまくしたてるテオドールの言い分は、困ったことに全く異論を挟む余地の無いものだった。

気づくと、ほとんど窓際まで追い詰められていたアモンは、陽光に照らされながら、まさに苦虫を噛み潰したような顔でテオドールを見上げている。

従者はそんな主人を静かに、そしてことさら冷たい視線で見下している。

アモンは外から聞こえてくる小鳥のさえずりまでが腹立たしく思えた。

主人と庭師

恐らく、百人が百人見て全員一致で不機嫌と分かる表情を携えて、アモンは城の外へ出ると真っ直ぐ中央庭園に向かって歩を進めた。

以前の居城とは比べ物にならぬほど狭小なこの古城のいくつかの利点のひとつは、目的地への移動が極めて短時間、かつ少ない運動量で可能なことであり、この点についてアモンは非常に満足していた。実際、無駄にだだっ広かった以前の城は、庭園に向かうだけでも軽く息切れするほどだったことを思うと、この城は日常生活を送る上では格段に快適であった。

しかし、不満は当然ある。

例えば従者についてである。

長年、前の城で務めていた従者は、ある者は一歩間違えば反乱分子扱いされかねない自分の境遇に恐れをなし、またある者は領地没収の上に雀の涙ほどに減ったアモンの懐を考えて己が給金の心配をし、まさに蜘蛛の子を散らすように去っていった。

拳句があのだ従者である。

テオドール。

主を主とも思わない亜人の従者。

思えば彼女を雇った経緯は極めて短絡的だった。

領地、財産を奪われ、辺境の古城にほっぽり捨てられるように放置

されたアモンは、一人の従者もない寂しい身を引きずりながら、古城の中をふらふらと彷徨っていた。

その際、無断で古城の中に居を構えて居座っていたのが彼女であった。

始めは追い出そうとも考えたが、洞人でありながら古城をまさに根城にしていた彼女の種族的価値観からすれば奇妙な行動に興味を持ったアモンは、何の気の迷いか彼女を従者として雇うことに決めた。

建前上は慢性的人手不足。

本音は単なる好奇心。

だが雇ったあとで後悔した。

まさかここまで従者に向かない性質だとは…。

とはいえ、人手不足は建前とはいえ事実。

結局、なんやかんやで今日も粗暴な従者に甘んじている。

アモンは起床からのいきさつを思い返すと、より不機嫌さに磨きをかけて、庭園へ向かう足を速めた。

「あ、殿下。本日もご機嫌麗しゅう…は無いみたいですね」

庭師の青年が複雑な挨拶をした。

少し向きになって早足で歩いたせい、アモンは肩で息をしていたが、表情は苦しさよりもまだ不機嫌さが強い。

「いつものことだアルセイデス。君は気にしなくて構わんよ」

呼吸を整えながら庭師…アルセイデスと呼んだ青年に気をかける。

（人は悲しみが多いほど、人に優しくできるのだな…）

アモンは一人で勝手に自分を持ち上げながら、庭師に手入れされた見事な庭園の様子を見て、ゆっくりと癒されてゆく感情に頬を緩めた。

「それにしてもお前は若いのに大したもの……」
言いかけて、アモンは少し考え込んだ。

思えば、彼は一体いくつなのだろう？

彼を雇った経緯もこれまた短絡的だった。

古城の荒れ果てた庭に心まで荒みそうになったある日、そんな庭よりはいくらかましだろうと城の外に広がる森をそぞろ歩いていたその時である。

野草を摘みながら、木々を眺め歩いているアルセイデスをアモンは見つけた。

華奢な体躯と少女のような顔立ちから、最初は青年であることに気づかなかったが、話しかけると気さくにしゃべり始めた彼の様子が妙に気に入る、即座に庭師として雇うことに決めた。

ちなみに、

テオドルの例に漏れず、彼もまた亜人である。

姿かたちこそ人間のそれとほとんど変わらないが、少なくともこの世に紫色の目をした人間はいないだろう。

種族については何度か尋ねたが、毎度はぐらかされてしまい、いまだ正確な種族は分らない。

アモン自身でも色々と調べてみたが、結局彼の種族は謎のままだ。
ゆえに彼の実際の年齢もまた分からないでいる。

「まあなんだ、お前は本当に良くやってくれている。嬉しく思っているぞ」

しっくりこない感覚を押し殺し、ねぎらいの言葉をかけると、アルセイデスはかたちを改め、静かに頭を垂れた。

「テオドールにも、お前の爪の垢でも煎じて飲ませたいところだな」
素性の明らかでない点を含めても、礼儀正しく丁寧なこの青年を、
アモンは心から信頼していた。

「ところで、今日はひとつ殿下にお見せしたいものがあるのですよ」
先ほどまでの機嫌の悪さはどこへやら、すっかり笑顔を湛えたアモンはうんうんとうなずくと、アルセイデスに促されるまま、庭の一角に向かった。

暖かい日差しの中、綺麗に整えられた庭園を眺めつつ、のんびりした表情で目的地に向かっていたアモンは、まさかその一角を目にした瞬間、自分がこれほど驚くことになるとは思ってもいなかった。

一見したときは単に樹の立ち並ぶ風景に思えた。

が、明らかに違和感がある。

樹の肌の合間に人の姿が見えるような…？

さらに近づいて目を凝らす。

違和感の正体を確認したアモンは文字通り、言葉を失った。

樹々の間に一本、中央辺りから人と思しき上半身が飛び出している樹があつたためである。

それは正確に言えば人間の少女のそれにより近かった。

若草色の柔らかそうな巻き毛をした愛くるしい少女の顔は、眠るように目を閉じ、頭から肩口、へその辺りまでのみを樹から露出したその様子は、見ようによつては裸の少女が樹に飲み込まれているようにさえ見え、その異様さをより強めていた。

「…これは何の樹だね、アルセイデス？」

「ドリアードです」

平然と答える。

「ベルディニオではこの辺りの森にしか自生しない珍しい常緑高木
の一種です。俗称を（人食いの樹）なんて呼ばれて気味悪がられて
ますが、とても貴重な樹ですので一度殿下のお目にかきたいと思い、
ご用意した次第です」

アモンは、（うん、ほんとに気味悪い）という心の声を打ち消すと、
主人の威厳を損ねないよう、強いて平静を装った。

「またいつにも増して妙な樹を植えたものだね」

「あと一週間もすればいよいよ幹から出てきますよ。楽しみにして
いてください」

「幹から出てくる？」

「ええ、ドリアードは成長すると樹から独立した固体としての生物
に変化するんです」

「それはとても楽しみな話を聞かせてもらったな」

「我々の間では（巢立ち）と呼んでいます。とても面白い光景です
から、殿下も是非ご覧になってください」

内心ではありがたいくない提案に、本心をぐつと隠してうなづく。

「では、私は少しばかり外の森を散歩してくることにしよう。あと
はよろしく頼んだぞ」

そう言うと、アモンは少し急ぎ気味に城門に向かって足を運ぼうと
した。

すると、

「ああ、それと殿下」

アルセイデスが呼び止める。

振り返ると、何やら肩から提げた小さな鞆の中を探り、おもむろに
小さな箱らしきものを差し出してきた。

煙草だ！

アモンは心の中で歓喜の雄叫びを上げた。

いつもは見慣れていた愛用の煙草入れがこれほど愛しく見えたのは恐らく初めてだった。

「ゴミ捨て場に捨てられていたんですが、もしやと思って拾っておいきました」

笑顔でそう話すアルセイデスを、アモンは今すぐ抱きしめてしまいたいと強く思った。

無論、変な意味ではない。

「煙草の葉もずいぶん捨ててあったんですが、そちらはもう湿気ってしまっていたので、とりあえず煙草入れとその中身だけでしばらく我慢してください。葉のほうは向こうで育てている分を少し早めに収穫しますから」

寝起きの不機嫌さはどこへやら、アモンは辛くも救出された煙草入れを開けると、中身の無事を確認してご満悦であった。

「アルセイデス。お前のような有能な従者を持てて、私はほんとに幸せ者だよ」

言いながら、やおら煙草入れから取り出した一本をくわえると、上着から取り出したマッチを慣れた手つきで靴のかかとにこすりつける。

勢い良く燃え出したマッチの先端で素早く口先の煙草に点火すると、深く紫煙を吸い込み、恍惚とした表情でゆっくりと口角の上がった口から煙を吐き出す。

（ああ、この時のために生きている！）

生の喜びを存分に満喫しながら、アモンは一人城門をぐぐり、森の散策へと向かった。

「日の暮れる前にはお帰りくださいね」

アルセイデスの言葉に振り返りもせず、ただ煙草を持った右手を高く上げ、ゆらゆらと振ってみせる。
日はまだ高い。

森と忘れ草

森に入ったアモンは周囲を探ると手ごろな場所を見つけて腰を下ろし、ゆったりと紫煙をくゆらせることにした。

煙草入れの中には現時点で在庫が二十と七本ある。

アモンは次の煙草の葉が調達できるまでどの程度かかるかを考えながら、慎重にこれからの喫煙ペースを模索していた。

深い樹々に囲まれ、薄い木漏れ日を見ながら忘れ草を肺に満たす。至福の時間をぼんやりと過ごしながら些細な思索にふけっていると、ふといつも思っていた疑問が頭をよぎる。

そういえば、アルセイデスはいつも一人でどうやってあんな樹々を庭に植えているのだろうか？

当たり前のことだが、苗木の状態で運んだというなら合点はいく。しかし、アルセイデスは常にああいった樹々を、成木状態で庭に植える。

うつすらとした想像の中、巨木を根っこから引き抜き、肩に担いで城へと向かうアルセイデスの姿が頭に浮かんだが、そのあまりの現実味の無さに想像を止めた。

（まあ、庭師の仕事の方法まで主人が把握する必要も無いだろう）

気づくと煙草の火が口元まで迫っている。

手の中の煙草入れを転がしながら、今、もう一本に火をつけるべき

か、アモンは苦悩した。

人の悩みは尽きない。

それがどんなにくだらな事柄であつても。

闇夜とドリアード

「バカ公爵！」

寝耳に水の例えはあるが、アモンにとってそれは寝耳に爆弾といったところだったろうか。

夕刻までのんびりと森での散歩を楽しんで城に帰り、夕餉を食べたところまでの記憶は残っている。

チーズにパン、野草のサラダと果物が数種、豚の燻製肉と玉ねぎのソテー、きのこ山芋のスープ。

散歩の疲れか、朝から何も口にしていなかったためか、今日のアモンはいささか食欲旺盛で、チーズと一緒にパンを三つとスープを二杯もたいたら、燻製肉のソテーも二皿目をおかわりするほどだった。食事と同時に一本半も空けた林檎酒もほどよく回り、良い心持ちで床に入った。

それがおよそ日暮れ少し過ぎ。

それからわずかに二刻ほどのち、熟睡中の右耳でテオドールの爆弾が炸裂した。

「アルセイデスが呼んでます。急いで起きて庭に行ってください！」
今、何が起きているのか全く理解できぬまま、アモンは顔めがけて投げつけられた上着を羽織ると、あたふたと小物入れの眼鏡を取り出し、まだふらつく頭と足を引きずりながら、階下へ早足で下ると、城を出、庭園へと向かう。

庭ではアルセイデスが待っていた。

「お待ちしてました殿下！」

珍しく、テオドール以上にアルセイデスが大きな声をかける。

「実は昼にお見せしたドリアードなのですが、どうやら早咲きだったらしく、今夜にも……いや、今にも（巣立ち）を始めそうになったもので、急ぎ殿下においでいただいたしだいなんです」

アルセイデスの瞳が期待と好奇心に輝いているさまを見て、何か言う気も失せたアモンは、寝ぼけた頭でうんうんとうなずいた。

そしてひととき大きなあくびをひとつ、声も上げずにつくと、少しはつきりしだした頭を回転させ、何か質問しようとしたその時だった。

庭の一角がぼんやりと光を放った。

途端、アルセイデスはアモンの手首を掴むと、強引にその光源へと引っ張ってゆく。

何度か何も無い地面に足を取られそうになりながら、謎の光源に辿りついたアモンは息を飲んだ。

それは予想を上回るほどに幻想的な光景だった。

昼に見たドリアードの樹から、半身を覗かせていた少女らしき物体が、全身を淡い光に包まれながら、ゆっくりと樹の幹から残りの半身を引き出していた。

それは（巣立ち）というより、（羽化）といったほうが表現として適切と思った。

実際、上半身のほとんどをすでにあらわにしていたそれは、背中に丸く折りたたまれたような羽がある。

まるで蝶の羽化。

声も無く見入る観察者をよそに、（巣立ち）はゆっくりと、ゆっくりと、進行してゆく。

やがて、すばめた傘のようになっていた羽が開くと、その時は訪れた。

広げたばかりの羽を力強く羽ばたかせると、幹の中に残された両足が一気に引き抜かれ、途端にその全身が宙を舞った。

まるでようやく得た自由に歓喜するかのように、淡く発光する羽の生えた少女が夜の闇を飛ぶ。

弓張りの七日月、鮮やかな星々、それらに自身の淡い光を伴って、夜を彩る。

闇に映える幻想的な光のショーはそうしてしばらく続いた。

アモンはとうに眠気も失せ、予想外に心躍る光景に天を仰ぎ続けていたが、ふと、背後の気配に振り返った。

そこには眼前の光のショーに気を取られている人物がもう一人。

テオドル。

粗雑で乱暴な従者。

それがまるで子供のような邪気の無い笑顔を満面に浮かべ、夜の光に見入っている。

「今日は珍しいものが二つも見れたな」

つぶやくと、アモンは改めて（巢立ち）の神秘に目を向け、静かに微笑んだ。

その身の自由を満喫するように飛び回る羽の少女が夜空の彼方へと飛び去っていったのは、それからしばらく後のことだった。

あとに残るは上弦の月。
数多の星々。

森を抜けてきた風が優しく頬を撫でた。

起床と飛翔

その日もテオドールはいつも通り、やたらと乱暴に主の寝室のドアを開け、森まで轟く大声を張り上げようとしていた。

が、

ドアを開け、アモンのベッドへと歩を進めたその瞬間、テオドールはたった今出そうとした声を飲み込んだ。

「ああ、おはようテオドール。今日はまた一段と爽やかな朝だな」
アモンは起きていた。

寝巻きのまま、日の当たる窓辺で伸びなどしながら、ひどく快活に声をかけてくる。

テオドールは飲み込んだ声もろともに絶句しながら、しばらくその場に棒立ちとなった。

（ありえない！）

愕然としつつ、心の中で叫ぶ。

それは事情を知らないそこいらの第三者には到底理解できない驚愕だった。

あのバカ公爵が朝、いや、正確にはもう昼というほうが近い時間ではあるが、自分が起こしに来るよりも先にベッドを抜け出している。自分の知る限りでも恐らくは他を完全に圧倒した大差で一位を取れるほどの自堕落かつ怠惰な無気力人間の鑑。名を呼んでやる気も失せるほどのあのバカ公爵が、自力でベッドから這い出している。

毎朝、まるで呼吸をするように当たり前のこととして主の強制起床に勤しんでいたテオドールだけが、この状況の異常さを感じ、とも

すれば恐怖すら覚えていた。

しかし、本気で天変地異の前触れを心配し始めているテオドールをよそに、アモンはさも清々しそうに窓の外を見つめている。

と、突然開け放たれたドアをノックする音が聞こえてきた。

「失礼いたします。アルセイデスです」

これまた珍しいことに、庭師のアルセイデスがアモンの寝室を訪ねてきた。

「おお、おお、アルセイデス。待っていたぞ」

庭師の声を聞いた途端、窓辺からまさしく飛ぶようにドアの前まで駆け寄ったアモンは、目を宝石のように輝かせながらアルセイデスに歓喜を含んだ声をかけた。

「で、どうだ。作業は終わったのか？」

はしゃぐように身を揺らしながら尋ねる。

すると、庭師の青年はなんとも言えない表情をしながら、伏し目にちに主人の問いに答える。

「それが…ちよつとですね、…乾燥に失敗しまして、その…、煙草の葉は全滅しました」

テオドールに続き、今度はアモンが硬直した。

「いや、ちゃんと注意して作業はしていたんですが、どうもこのところ空気が異常に乾燥していたせいだと思っただけで、乾燥が進みすぎて、なんというか、こっ、粉微塵という感じになってしまつてですね…」

アモンは先ほどまでが嘘のように、一切の表情を失った顔でアルセイデスを見つめた。

次第に背は猫のように丸まり、肩は重い荷物でも持たされたように落ち込んでいく。

つかの間の沈黙をはさみ、

アモンはゆっくりとベッドへ向かうと、静かに体をその中に滑り込ませ、言った。

「…寝る」

再びの沈黙が訪れてすぐ、棒立ちしていたテオドールはつかつかとベッドへ歩み寄ると、全身全霊を込めた蹴りを主人の背中に叩き込んだ。

今日もまた、アモンの体は宙を舞う。

城壁と来訪者

結局、アモンは起きることになった。

新たな煙草の在庫確保に失敗し、従者の凄烈な蹴りを受けてひどく痛む背中が完全に彼の心を打ちのめしていたが、かといって寢床に居座ろうとすればテオドールのさらなる仕打ちが心配でおちおち寝付けそうにない。

そんなわけで今日も飽きずに森の散歩に赴くことにした。

「それじゃあ、後は頼んだぞ」

見送るアルセイデスに後ろ向きで手を振りながら、アモンは城門をくぐる。

ちょうど真上辺りで照りつける日差しを見ながら、さて今日は森のどの辺りまで行こうかと考えを巡らしつつ、そぞろに足を動かす。

と、その時。

森へ向かい、城の外周を四半周ほどしたところで、アモンは城壁の一部に人影を見た。

見ると若い女性のように見える。

城壁に背をもたれてうずくまるようにして座り、うつむいた顔は見とれるほどに美しかったが、表情も無く浅く早い呼吸と、汗に濡れた蒼白の顔色は明らかに体調の異常を表していた。よく見れば、右の肩口に深々と矢が刺さっている。

アモンは分かりやすい困惑の表情を浮かべた。

（これはまた面倒なことになりそうだな…）

一瞬、色々と考えてみたが、最終的にアモンはその女性を城に運ぶ

ことに決め、やおら女性の左脇へ自分の右肩を滑り込ませると、続いて両腿の中央辺りを左手で持ち上げ、抱きかかえる形で再び城へと戻っていった。

運んでいるうちに気づいたが、どうやら女性は亜人のようだった。

肌は白いが、耳はテオドールのそれとよく似て長い。

特徴からして、恐らくは森人だろう。

なんにせよ、早く治療する必要がある。

搬送と治療

「おいアルセイデス、テオドールに医療箱を持って急いで一階まで来るように言ってくれ。それと剪定バサミをちよつと借りるぞ」

今出かけたばかりの主が、間も無く女性を抱えて帰ってきたことにアルセイデスは最初こそ驚いたが、その女性の怪我を見て、事が緊急を要することを即座に察し、アモンの指示を忠実にこなしていった。

アモンはまずアルセイデスから剪定バサミを借り受けると、女性を抱いたまま、器用に右肩に突き刺さった矢の矢じりを切り落とした。これは後に矢を引き抜く際、返しのついた矢じりが邪魔になるのを見越しての処置である。

続いて、アルセイデスがテオドールを呼びに行く。

アモンのほうは、城の一階にあるベッド付きの空き部屋へ向かい、ドアの金具が壊れるのも構わず、強引にドアを蹴り開けると、部屋の中央にある粗末なベッドに女性を乗せた。

「何事ですか公爵！」

医療箱を持って部屋へと駆けつけると、普段は決してしないであろう口調でテオドールが問う。さすがの彼女も、場の空気は読むようであった。

「細かい話は落ち着いてから話す。それより、さっさと医療箱を開けてそこに置いていけ。あとは…そう、湯を沸かせ。煮え立ったらまた知らせろ」

いつもの態度からは想像もつかないほど、テオドールはアモンの指示に対して即座に、極めて従順に従う。

「それで、私は何をしたものでしょう？」

まずは言いつけを果たしたアルセイデスが、次の支持を聞いた。

「そうさな、下手をすると薬が足りなくなる可能性がある。その時には改めて指示するから、指定した薬草を大急ぎで確保してきてくれ」

「大抵の薬草でしたら、庭ですぐ調達できます。いつでも言うってください」

「それまでは私の側にいる。お前の薬草学の知識を借りることになるかも知れん」

言われて、うなずいたアルセイデスは部屋に待機する。

そうこうするうちに、アモンは本格的な治療にかかり始めた。まず傷に触れぬよう、左肩を下にして横向けに寝かせていた女性の傷を見るため、医療箱から取り出したハサミで傷口付近の服をすばやく切り開く。患部が露出すると、どうやら出血はそれほどひどくない。刺さった矢がそのまま止血している形になっているためであろうが、問題はそれがどの程度なのかである。

もし矢が大きな血管を傷つけているならば、矢を抜いた際に大量出血を起こす危険がある。とはいえ、矢をそのままにしておいたのでは、当然ながら傷は治ることはないし、結果的には内出血で失血死という末路は変わらない。

「さて、あまり気乗りはせんが、ひとつ運試しといこうか」

口にした台詞とは逆に、アモンの表情は極めて真剣だった。

「アルセイデス、すまんがここを両手でしっかりと圧迫していてくれ。この位置の傷なら万が一血管が傷ついていても、これでほとんど止血できるはずだ」

アモンはアルセイデスが指示された通りの位置を圧迫するのを確認すると、医療箱の中から布を一枚取り出し、それに火酒をふりかけて先ほど切り折った矢の先端に拭いをかけると躊躇無しにこれを引き抜いた。

と、栓を抜かれた形の傷口から一気に出血が始まった。

女性の肩口が見る間に鮮血で染まってゆく。

しかし、アモンの表情は落ち着いていた。

その出血の程度からして、大きな血管に傷は無いと判断し、医療箱から取り出していたツルモドキのチンキを傷口とその周辺にたっぷりかけまわすと、油紙と清潔な布で傷口を覆う。

ツルモドキはケシ科の多年草で、その葉が細く丸まり、まるで蔓のように見えることからその名がついている。一般的に土のある場所ならどこにでも自生し、止血・消炎鎮痛作用のほか、チンキにすれば消毒と化膿止めといった効能も持つため、古くから外傷によく用いられてきた薬草のひとつである。

「ひとまず、これで応急処置は完了だな。あとはゆっくり寝かせて様子を見るとしよう。アルセイデス、止血はもう大丈夫だ。お前も手を放しなさい」

アモンは緊張が解けたようで、大きなため息と同時に肩を落とすと、アルセイデスに微笑みかけた。

「公爵、湯が沸きました」

けたたましい足音と共にテオドールが部屋を覗き込んだのはすぐその後だった。

「ああ、すまない。ではこれを湯に落として十分ほど煮てくれ。終わったら、湯から上げて自然に乾くのを待って、医療箱に戻しておいてくれるか？」

部屋の出口まで進み、テオドールに先ほど使ったハサミを渡す。

今度もまた、テオドールは何も言わずに主人の指示に従い、台所へと駆けていった。

「すまないがアルセイデス、彼女の様子を見ていてくれ。もし苦しそうな様子だったらこれを小さじに一杯飲ませて眠らせてくれ」

アモンは医療箱からさらに薬瓶を取り出すと、アルセイデスに手渡した。

スナネグサのチンキである。

スナネグサはその名の通り、砂地に自生するアカザ科の二年草で、

蒸留酒の原料としても有名だが、精神安定・緊張緩和など、神経症などの治療薬としても広く使われている。

「私は二階の書斎にいる。何かあったらすぐ呼びなさい」

気だるそうに立ち去る主人の背中を目で追いながら、アルセイデスもまた、軽いため息をついた。

決断と狂血草

「殿下！」

アルセイデスが悲鳴のような声を上げたのはすでに深夜を回ったころだった。

書斎の机にもたれかかり、低い寝息を立てていたアモンは、すぐさま飛び起きると部屋の外に飛び出した。

「ご指示通り、苦しそうな様子が見えたのでスナネグサのチンキを飲ませたんですが、それでも一向に症状が良くならないもので…」

アルセイデスは赤くなつた目を不安そうに主人に投げかけた。それは睡眠不足によるものか。それとも泣いているのか…。

アモンは無言で足を階下の治療室に向けた。駆け抜けるような全速力で。

件の女性の元についた時、アモンはひどい胃の痛みに襲われた。女性は見つけた時よりも荒い息を吐き、顔色は蒼白から土気色に変わっていた。

嫌な予感を振り払いつつ、アモンは女性の脈を取り、胸に耳を当てる。

「…くそっ、嫌なほうに転んだらしい。心臓が弱ってる」

拳で自分の額を叩きながら、アモンはうなるように言った。

「あの出血量なら大丈夫だと思っただが…」

予想していたとはいえ、その中でもかなり運の悪いほうへと傾いた女性の症状を見、アモンは狼狽と憤慨を入り混じらせて床を蹴った。
「殿下…、一体どうしたら…」

アルセイデスの不安げな声に一瞬怒りが込み上げる。

何故私に問う！

何故私にすぎる！

私が何でも出来るとでも思っているのか！

アモンは情けない表情をアルセイデスに見せまいと、無意識のうちに部屋の外へときびすを返した。

すると、部屋の外でもう一人の従者、あの小生意気なテオドルが、アルセイデスと同じく、今にも泣き出しそうな顔でこちらを見ていた。

愕然とした。

ことここに及んで、回りの全てが自分を頼りきっている。

吐き気がした。

あまりの胃の痛み心臓までが痛むようだったが、

「…狂血草を使うぞ」

公爵たる自分に後退は許されない。

「狂血草？だってあれは…」

「やかましい、この期に及んで手段を選べるか！」

アルセイデスの問いを断定的に振り切る。

狂血草とは、通常は野山に生えるキキョウ科の多年草である。

心臓病や低血圧症の治療などに使われるほか、興奮剤として用いられる。しかし、有効な服用量は極めて少量であり、誤って多量に摂取すると不整脈・眼底出血・肝機能不全を引き起こす危険性が高い。そして、この場合の投与量は、間違いなく安全値を超えたぎりぎりの量が必要となることを主人も従者も共に理解していた。

だが現実として、今この状況で行える有効な治療は他に無いのも事

実である。

「計量器を用意しろ。真水で狂血草チンキ一滴を六十倍希釈だ。それを一時間ごとに大さじ一杯ずつ、四回投与。分かったな」

アモンの指示の下、アルセイデスは主人の希釈した狂血草チンキを投与した。

一時間に一回。

四時間で合計四回。

それは恐ろしく長い四時間だった。

一分一秒の感覚が異質に思えた。

耐え難いほどの精神疲労。

しかし、時間は確実に過ぎる。

そして良かれ悪しかれ、結果は必ず訪れる。

夜明けと安息

小鳥のさえずりが聞こえる。
窓からは薄日が差してきた。

ベッドの隣に椅子を置き、瞬きすら忘れて女性の変化を観察し続けたアモンは、無表情につぶやいた。

「峠は越したな…」

アモンの対面に座っていたアルセイデスは、その言葉を聞くとまるで倒れこむようにがっくりと肩を落とし、大きなため息をついた。
無論、全てもたらされた安心による反応である。

女性の呼吸は浅く、穏やかになり、顔色も鮮やかな血色を取り戻していた。

「疲れているところすまんが、アルセイデス。テオドールにも知らせてきてもらえるか。あいつも恐らく起きてるはずだ」

言われて、主に返事すら忘れて部屋を出て行く。

残されたアモンは乾ききった眼球で窓を見ると、昇り始めた日の光にしばし見入った。

「さて、まずは当座の面倒は回避できたな。あとはこの女…、どうしたものやら、な」

すっかり正常な寝息をたてる亜人の女性に視線を移し、睡眠不足の頭を動かそうと試みる。

どうやら今の頭は動きそうも無い。

アモンは鼻眼鏡を外すと軽く伸びをしてから、鈍った頭をすっきりさせようと、本来は消毒・薬品希釈用の火酒を用済みになった小さ

な器ごとぐいと飲み干した。

丸一日飲み食いしていない体をまさに火が巡った。

これであとしばらくは起きていられるだろう。

焼ける胸を冷ますように深い息を吐くと、再び眼鏡をつける。

と、ここから部屋を四つほど隔てた台所から泣き声が聞こえてきた。
テオドールの声だった。

（鬼の霍乱とはこのことだな…）

痛む腰を丁重に扱いながら、アモンは椅子から立ち上がると、軽い
立ちくらみを楽しんだ。

森人と不穩

森人の女性は、名をメイフレイルといった。

これを聞き出すだけでも意識が回復するまでの二日間を要した。

肩の傷はうまく骨に弾かれて急所を外れており、貫通こそしていたが、逆にそのおかげか傷口は綺麗なもので、塞がるのにもそれほど時間はかからないように見える。

念のため、町から医者と呼ばうかとも考えたが、亜人差別の強いこのご時世、明らかに森人と思しき女をまともに見れる医者がいるとも思えず、これについては却下となった。

「で、という経緯でこんな目にあったのか、その辺りを聞きたいんだがね」

ベッドの上に半身を起こしたメイフレイルに、アモンが訊ねる。

しかし、女性は返事の代わりに深いうつむきと、小刻みな肩の震えで答えるのみだった。

そしてあまりに進展しない二人の会話を見かねて、アルセイデスが助け舟をだしたのはそんなやりとりが五度目を数えようかといったときだった。

「メイフレイルさん。この御方は今でこそこんな辺境にお住まいになっ
ていますが、恐れ多くも現国王、ウェイディ国王陛下の従兄弟に
当たられるアモン公爵殿下なんですよ。何も心配する必要はあり
ませんから、怖がらずに全て話してください」

「貴族……！」

アルセイデスの説明からアモンの素性を知った女性は、明らかに今
まで以上におびえ始めた。

まるで自分を射た本人を前にしているように。

思いもよらず事態を混乱させてしまい、困惑するアルセイデスを他所に、

「…どうやら私はここにいないほうが良さそうだ。アルセイデス、お前もそろそろテオドルと交代しろ。元来お前の仕事は庭師なんだから」

わざとらしく冷たい物言いをして部屋を出る。

それはアモンがある種の確信を持ったときに行う無意識の行動のひとつだった。

そして、大抵それは当たるのだ。

（私の悪い予感が外れたことは無いからな…）

部屋を出、書斎に向かったアモンが城の外から響く大きな男の声に気づいたのは、まさに書斎の戸を開けようとしたときだった。

伯爵と公爵

アモンは駆け足だった。

そのため、玄関を開けようとしていたテオドールを止めることに成功した。

今まさに戸を開けようとしたところをアモンに肩を掴まれて制止されたテオドールは、びっくりしながらも主にいつも通りの冷たい視線を向けたが、心なしかその視線は普段よりも柔らかい印象があった。

「何ですか、一体？」

「いいから、お前は私の後ろについてきなさい。何もしゃべらずにな」

当然ながらテオドールは疑問を感じた。通常、客人への対応は従者の役目である。それを何故、主自ら？

「しゃべるなって……」

「客の対応は私がする。いいか、とにかく口を完全に閉じておけ。お前は黙って私の後ろにいればいい。何があってもしゃべるな。これだけは守れ」

いつもの無気力な様子はどこへやら、今日のアモンの口調は一切の取り付く島が無かった。

仕方なく、テオドールは主の指示に無言でうなずき、玄関を開けて城門へと向かった。

指示通り、アモンの背に張り付くようにして。

城門の外には馬が四頭。そして屈強な男が三人と、見るからに貴族階級と思われる男が一人。その男だけは馬から降りず、黙っただけでも伝わってくる強烈な傲慢さでこちらを見遣っていた。

「この城の主はおられるか！」

一番手前に出ていた男の一人が雄叫びのような声を上げた。どうやら城の中まで聞こえていた声の主らしい。

アモンはさもうるさそうな顔をしながら、庭園を横に抜け、城門まで来ると、これまた面倒そうに答えた。

「私だ」

声に反応するように、手前に陣取った三人の男たちは後方へ下がり、一人、馬上からこちらを見据えていた男が前方へ出てきた。

「これはアモン卿。また随分と立派な城に移られたようですね」
男の言葉から発散される嘲りをアモンは無視して訊ねる。

「こんな辺鄙な場所で迷子にでもなったか、それとも何か変わった道楽かな、オストウム伯爵。」

言葉の辛辣さではアモンも負けていない。

オストウム伯爵といわれた男は、自分の言動を棚に上げてさも不愉快な表情を浮かべたが、ふん、と鼻を鳴らすと、ようやくに話の本题に入った。

「実は我々はここしばらくこの地でのんびりと羽を伸ばしていたのだが、少しばかり問題があったのでね。卿に少々聞きたいことがあるのだよ」

「質問を受けるほど変わった生活はしていないつもりだが、聞くだけ聞くとしよう。どんな質問だ？」

「実は数日前、狩りの獲物を逃してね」

アモンは自分では冷静を装っているつもりであった。

が、真後ろで主を見ていたテオドールには、アモンの拳が小刻みに震えるのがはっきりと目に取れた。

「狩りというと…」

自分でも分かりきった質問に嫌気を感じながら、アモンが問う。

「もちろん、（亜人狩り）さ」

オストウムは薄ら笑いを浮かべて答えた。

「…亜人解放派のレムレス国境の鼻先で亜人狩りとは、あまり感心

せんな」

「なあに、我がベルディニオはベルディニオのやり方を通すまで。法王とはいえ、内政干渉なぞ出来ようはずもあるまい。大陸三大列強が一国の名は伊達ではない！」
鼻息も荒くまくし立てる。

「このベルディニオがいつから貴様の国になつたのかという疑問はさておき、だ。いい加減で質問をはっきりしてもらえんかね。私もこう見えて暇ではないんだ」
オストウムの顔が再び曇る。

そしてようやくに質問はなされた。

「なに、数日前の狩りの際、少々しくじつてね。獲物を取り逃したんだが、どうやらその獲物はこの辺りで姿を消したのだよ」

「ほお」

「獲物は白エルフでね。しくじつたとはいえ、十分な手傷は負わせたはずだ。そう遠くへ逃げ切れるとも思えん。でだ。卿にお尋ねしたいんだが、その獲物に心当たりは無いかな？」

無表情なはずのアモンの表情が、心なしか影を帯び始めた。

「知らんね。恐らくはどこぞで事切れてるんじゃないのか？」

「確かに、その可能性も十分にあり得る。しかし卿、その考えをどうも腑に落ちさせないものがあるのだよ」

いやらしい顔つきでオストウムは続けた。

「卿がはべらせているその黒エルフさ。もしや博愛主義のアモン卿は、そこらに転がる亜人を見つけては、城にかくまってでもいるのではと勘繰りましてね」

「この者はテオドール。私の従者だ。それと、この者は洞人だ。黒エルフという呼び名は謹んで貰おう」

「黒エルフは黒エルフだ。一体他の何だと言うんだね。大体、従者だのと大層なことを言っていたって、所詮はもうお手つきなんだろう？」

オストウムの淫猥な物言いに、テオドルが怒りのあまりアモンの背から飛び出そうとしたその時、

アモンは静かにテオドルの進行方向を手でさえぎると、ふいと後ろを振り返り、笑顔と共にそっとうなずいた。

次の瞬間、

城門へ向かいなおしたアモンの顔は一変し、冷徹な声でオストウムに呟いた。

「馬を下りろ」

明らかに辺りの空気が一変した。

一瞬にして緊迫した場の空気を読まず、アモンの呟きを聞き損ねたオストウムが、その生涯で最大の失態を犯したのはまさにそのあとであつた。

「は？」

とぼけた口調でオストウムがアモンに問うたその刹那、アモンの声は雷となってその場の全員を貫いた。

「馬から下りると命じたのだこの身の程知らずの青二才が！」

この時のアモンの表情を見たもので、その場にひれ伏さぬものはいなかったろう。実際、オストウムの付き人である三人の男は素晴らしいまでの早さで片膝をつき、地に伏した。全員、顔からは脂汗が溢れるように流れている。そして、あまりに突然の豹変と、その恫喝の凄まじさに当のオストウムもまるでそれが自然な体の反応とでもいうようにすぐさま馬上から下り、形を改めた。

顔はこわばり、歯の根も合わなくなっている。

「私は慈悲深い人間だオストウム。だが、その慈悲にも限度がある。貴様が今、口をきいている者は何者だ。畏くもベルディニオ前国王カムラン・ベルディニオ・マーロウ陛下より直々に賜りし爵位、四大公爵家の第一に挙げられるモルガン公爵家の当主にして、現国王ウェイディ・ベルディニオ・マーロウ陛下の従兄弟なる、アモン・

ハイラッド・モルガンである。貴様如き身分の者がかような非礼を連ねて、無事で済むなどとは思わぬことだ！」

先ほどのオストウムの付き人が出した声が、城まで響く声だとするなら、今アモンが発した言葉は森を越え、遠くレムレスにすら伝わるほどの大音声だった。

「二度とは言わん、私の前から消えろ。永遠にだ。次に私の目に貴様の卑しい姿が映った時は、それが貴様の最期と思え！」

言い終わるや、アモンは招かざる客へ帰りを促すように右手を大きく横に払う。

オストウムと付き人はもはや泣き面の体で深く抵頭したまま、馬に乗ることも出来ず、引きずるように馬と共に森の中へと消えていった。

困惑と赤面

オストウムの帰ったあとも、アモンの不機嫌はしばらく続いた。

テオドールに林檎酒と軽い食事を頼み、書斎に入って気に入りの薬草学の本を読んでいる最中も、胸の辺りがむかついてたまらないといった具合だった。

しかし、いつもなら林檎酒の瓶と杯、それに丸々一個のパンと雑に切ったチーズを盆に載せてもってくるのが普通のテオドールが、珍しいことに手ごろに切り分けたパン、とき卵に細かにしたチーズと野草を入れ、軽く塩を振って焼いたものを持ってきて、しかも林檎酒をわざわざ杯についていくのを見て、一瞬怒りを忘れてあっけに取られた。

それがいつも通りの粗暴な態度のまま行われたから、余計にアモンの疑問は余計に大きかったのかもしれない。

書斎を出る際のテオドールの手際は相変わらず手荒であり、閉まるドアの風圧で林檎酒の瓶は揺れた。

とはいえ、色々と考えさせられることはあるが、とにかく今現在の空腹を満たすことに専念しようと、

アモンは目の前の食事を黙々とやつつけ始めた。

「テオドールさん、いいお話ですよ」

メイフレイルの食事を片付け、食器を持って台所を訪れたアルセイデスは、うれしそうに話しかける。

「さっきの城門前でのいきさつ、全部こちらでも聞こえていますからね。メイフレイルさん、あいつらにひどい目に遭わされたことで貴

族に恐怖心を抱いていたみたいですけど、殿下のお人柄が分かったらしくて、どうやら心を開いてくれたみたいです」

「そう、それは良かったね」

洗い物をしながら、気も無く返事をする。

それを少し不思議に思いつつも、アルセイデスはテオドールの横へ下げてきた食器を置いた。

すると、

「あれ？」

アルセイデスがテオドールの変化に気づいた。

「どうしたんですテオドールさん、顔色が変わですよ？」

言われて、テオドールは濡れた手も構わず、アルセイデスを台所から追い出しにかかる。

「出てけ！」

「ちょ、ちよつと、だってテオドールさん、顔が真っ赤……」

言い終わらぬうち、アルセイデスを追い出した台所の戸は堅く閉じられ、以後、日が落ちるまで開くことは無かった。

疲労と鈍感

テオドールに閉め出しを受けたアルセイデスは、その足でアモンの書斎へと向かった。

実際、メイフレイルの話については先にアモンに聞かせるのが筋ではあったが、食事の主を気遣い、食器を下げるついでにテオドールへ報告した。

が、テオドールの反応はアルセイデスをひどく当惑させ、結果としてやはりアモンへ報告することに決めたわけである。

当然ながら、食事をすでに終えていたアモンとの会話は何の問題も無く行われた。

「まあ、気を許してもらえたのはありがたいな。これでようやく話の全体が見えてくるかも知れん」

アモンは杯の林檎酒をちびちびと飲みながら答えた。

「しかしまあなんだ、話といっても昨日の今日だし、あの貴族の面汚しも立ち去ったし、話は明日というわけにはいかんものかな？」

「ダメですよ。せっかく本人が話す気になったんですし、もし明日になって気が変わったりでもしたらそれこそ手間ですよ」

「…やはりそうか」

ここ数日、森人の治療と看病で疲れきつているところに、先ほどの騒動もあり、アモン自身はできればもう今日は休みたいところであったが、どうにも事態はそれを許してくれそうに無い。

その身を高位に置くものは自然、それに見合った責任を負うものである。

アモンは重い腰を上げると、残りの林檎酒を杯に全て空け、一気に

それを飲み干してから書斎を出ようとドアノブに手をかけた。

と、ふと思いついて後方のアルセイデスに向き直り、ちょっとした質問をした。

「そういえば、先ほど台所のほうからテオドールの怒鳴り声が聞こえたように思うんだが、一体何事だ？」

「それが…、どうもよく分からないんです。私としては何も心当たりは無いんですけど、なんだかテオドールさんを怒らせちゃったみたいで」

「ふむ」

「なんでしょうね」

「分からないな。どうも今日のテオドールは情緒が不安定らしい。放っておくのが最善だろう」

「ですね」

向き合いつつ、二人同時にうなづく。

奇妙なことに、この主人と庭師は鈍感という点で極めて似通っていた。

会話と就寝

なにより最初に驚いたのは、信頼を得られたと聞いていたメイフレイルの素晴らしいほどに豹変した態度だった。

ここ数日のおびえきった様子はどこへやら、アモンも辟易するほどの饒舌となり、自分の身の上を事細かに語り始めた。

「レムレスって国のことはご存知ですか？」

「もちろん知ってるとも。なにせ隣国な上に、大陸の中でも特に変わった国だからね」

アモンは眠い目をこすりたい衝動を、ケシ粒ほどの根性でこらえつつ答える。

「私、そこからここまで来たんです」

「国境を越えて？」

「はい。レムレスはとってもいい国で、私たちを守ってくれるし、とっても暮らしやすいところなんです。けど…私、なんだか毎日変わらない生活が退屈になってきて、それでちよつと普段とは違うところに行きたくなつて、いつもは行かない森のずつと奥までいってみようと思つたんです。途中に国境の注意書きが書かれた看板も立つてたんですけど、私、ただもつと色んなところが見たくつて…」

そこまで言つたところで、突然メイフレイルが口ごもる。

そこへ落ちそうなまぶたを貧弱な気力で持ち上げ続けるアモンが、察しを入れて代わりに話し始めた。

「で、その途中であの連中と出会つた、と」

「…はい。最初はなんだろうと思って、木の陰から様子を見ていたんですけど、急に私がいるのに気づいたら、いきなり近づいてきてそれで、一人の人が馬の上から私に弓を…」

そこからの話は簡単だった。

最初の一撃で矢を右肩に受けた彼女は彼らに追われるようにベルデ
イニ才側へと逃げ込んでゆき、最後はこの城の側で力尽きて倒れた
らしい。

「こちらの国では貴族の方はあんなひどいことをするんですか？」

「うーん、まあそれは完全に人によるな」

「……そうですね。公爵さまみたいに親切な人もいますものね」

「運が悪かったといえば簡単だが、あんなろくでなしを放置してい
る責任はこちらにある。我が国を代表して謝罪するよ。本当にすま
なかった」

アモンは形を改めると、亜人の女性に対して迷い無く低頭した。

一国の貴族が、それもただの貴族ではない、王族に名を連ねる人間
が亜人相手に頭を下けている。

それは亜人保護を進めるレムレスでさえ考えられない行為だった。

メイフレイルは目を丸くしてその様子を驚き見ていたが、すぐにあ
わてて自身も深く頭を下げた。

アルセイデスはそんな様子を傍らで見ながら、吹き出しそうになる
笑いをこらえるのに必死になっている。

話がひと通り終わった時、外はちょうど日も暮れ、薄い藍色の光が
窓から入るのみとなっていた。

「それでは、今日はこのあたりで終わるとしようか。ゆっくり休ん
で傷を治すのに専念
するといい」

（ゆっくり休んで）の部分は、ある意味自分に対しての言葉でもあ
った。アモンはようやく寝床に入れる安堵感から、気持ち足取りも
軽く部屋を出、もはや愛しささえ感じる寝室へと入ってゆくと、椅

子に上着を脱ぎ捨て、滑り込むようにベッドへと入り込む。

深い眠りにつくのにほとんど時間は必要なかった。

日の昇るまでしばし、臥所に城主の静かな寝息が響く。

公爵と使者

「バカ公爵！」

心地好い眠りをお決まりの罵声が切り裂いたとき、アモンは天井を睨みつけている自分を自覚していた。

「テオドル…、お前も分かっているはずだろう。私はここ数日、例の森人を拾ってきても罰は当たらないんだ。せめて今日ぐらいは思うさま寝坊しても罰は当たらないだろうに」

「そうはいきません。ほんの少し前にレムレスからの使者だとかいう方々が貴方にお目通り願いたいと、尋ねてきたとこなんです。さつさとこれ着て一階に行ってください。お客様をお待たせしたら失礼ですよ！」

寝ている主人の顔に上着を押し付けるのは失礼には当たらないのかという疑問を考え込む余地も与えられず、アモンはさらにテオドルに襟首を掴まれ、力任せにベッドから起こし上げられた。

ふわりとベッド脇に着地した主人を確認すると、テオドルは軽うなずいてから部屋を出る。

朦朧とする意識の中、手に持った上着をほとんど無意識に羽織ると、続いてアモンも部屋を出た。

（私は何か神に恨まれるようなことでもしたかな…）

力無いあくびをかきながらそんなことを考えつつ、階段を下りるとさつそく階下でテオドルが苛立たしげに待っていた。

「なにのんびりしてるんですか。お客様、もうあの森人の部屋でお待ちですよ！」

言われて、件の森人の部屋へと向かう。足取りはこの上なく重い。

大体、レムレスからの使者とはなんだ？

またぞろベルディ二才の亜人差別に文句でも言いに来たか。

とするなら、私なんぞのところに来るのは筋違いだ。とつくに政治的には失脚している私にそういった話を持ってこられても困る。文句があるなら法王の書簡のひとつでも持って、ウェイディのところにでもいくのが筋だろうに…。

などと考えながら、今メイフレイルにあてがい、そしてさらにレムレスからの使者がいるという部屋の前まで来て嫌なことが頭をよぎった。

（まさか今回の件で私が怒られるなんてことはないよな…）

当然、メイフレイルの傷の咎はアモンにはない。それどころか、必死の治療と看病をした事実からすれば、褒められてもいいほどである。

しかし、

（事実がどの程度正確に伝わってるかが問題だ…）

アモンは天を仰ぐと、大きなため息とともに部屋のドアを開けた。

部屋に入ると、まずは見慣れた部屋のほぼ中央に位置するベッドとそれに寝ているメイフレイル。そして、新たに人物が二人。

一人は服装からしてそれなりの身分であろうことが分かる痩せた長身の男。ベッド脇の椅子に座っていたが、アモンの入室に合わせて立ち上がったその身長は、アモンより頭ひとつ分ほど高いテオドルよりもさらに高い。背中ほどの長さの金髪を後ろで結い、表情は穏やかな笑顔。だが、その目はまるで疲れきったように生氣が無く、目の下にまるで影のように張り付いた濃い隈がこの人物の印象を一種異様に感じさせた。

もう一人はその男性の横に立っていた恐らく森人と思しき女性。亜人でありながら、さすがはレムレスといったところか、しっかりと

した服装をしている。

男性と同じく、金色の柔らかそうな髪を短く切り、顔は整った美しさに加えて凜としたりりしさが漂っている。

「これはアモン殿下、突然の訪問で申し訳ありません」

長身の男から話を切り出してきた。

「私はフューレイ・ファルバス。レムレス亜人保護庁付外交特務官という面倒な肩書きのものです」

「確かに、少々長つたらしい肩書きですな」

フューレイと名乗った男がアモンの返事にクスリと笑った瞬間、アモンは先ほどからこの男に感じていた違和感の正体に気づいた。

それが何故なのか原因までは分からないが、この男の表情には常に狂気が染み出している。

「私の隣にいるのは、助手のアルバインです。どうかよろしくお願います」

「アルバインと申します。殿下にはお目通りをお許しいただき、恐悦にございます」

アルバインと名乗った森人が元から改まっていた姿勢をさらに改め、丁寧に一礼した。

「おい、アルバイン。殿下に領土侵犯に関するお詫びと亜人の引渡し要請をしたための書簡をお渡ししなさい」

「いや、そんな大層なものが必要ではないよ。領土侵犯といっても政治的でも軍事的でも、まして亡命というわけでもなかったわけだし、当人の傷さえ治ればすぐにお引渡しするつもりだ」

本気で面倒に思い、アモンは丁重に断った。

「いやいや、これはあくまで形式的なものですので、ご面倒とは思いますが、殿下にはどうか受け取っていただきたい」

アモンはこれ以上断るのもまた面倒だろうと諦め、軽くうなずいてアルバインから書簡を受け取るうとした。

すると、

「アルバイン、左手ではない。右手でお渡ししろ」

フューレイが突然、助手へ奇妙な命令をした。

言われてみれば、確かにアルバインは左手に書簡を持ち、手渡そうとしていた。だが、それがどうしたというのだ？

左利きだからといって、その程度のことをいちいち気にするほどのことだろうか。

アモンは少々困惑したが、その時、アルバインがそれ以上に困惑している事実を、彼には知る由も無かった。

「フューレイ様、しかしそれは……」

「大丈夫、心配はいらないからしっかりと右手で書簡をお渡ししなさい」

促され、アルバインはフューレイに一礼、続いてアモンに深く一礼すると、右手に左手を添える形で、書簡を差し出した。

瞬間、アモンは愕然とした。

フューレイの助手、アルバインという名の森人の右手は、複雑に金属の組み合わさった義手だったのである。

一瞬、間があつてから、アモンは書簡を受け取り、心の中で密かに憤った。

（……わざわざ助手にそんなものを晒させるとは、この男、オストウム以上の下衆野郎か！）

アモンがまさにそう考えたその時だった。

フューレイは今までの微笑から一変し、いきなり大声で笑い始めた。あまりの急なことにアモンが呆気にとられてみると、しばらく腹を抱えるように笑っていたフューレイが、呼吸を整え、落ち着いた調

子を取り戻して話し始めた。

「いや、失礼。分かっていたつもりだったのですが、まさかこれほどとは想像もしていなかったもので、ついうれしくて笑いをこらえられませんでした」

「…どういう意味だ？」

動揺しながらも、アモンはことの真意を問うた。

「殿下、貴方は私が考えていた以上に良い人だ。正直、これほどの善人と会ったのはもしかすると始めてかもしれない。私はね、殿下が亜人に対して差別や嫌悪を抱かない人物だということまでは分かっていた。しかし、さてこのアルバインの右手を見てなお負の感情を彼女に抱かないか、私はそれを知りたかったです。だが、貴方は彼女に嫌悪を抱くどころか、それを指示した私を憎んだ。それが私はうれしくて仕方が無いんですよ」

フューレイの言う意味を理解しようと、アモンは必死で頭を回転させた。

だが、それを理解しようとするほど、明らかに不自然な感覚に囚われた。

何故、この男は私が考えたことを知っているんだ？

「非礼は深くお詫びします。しかし、殿下とは楽しいお話が出来そうですね」

気づかず、アモンは額から脂汗が滲み出していた。

フューレイの目は不気味にアモンを見つめている。

疑心と異能

「お顔の色が優れませんよ？」

アモンは当たり前だという気持ちでいっぱいだった。

これだけ訳の分からないことを散々突きつけられて、一体どうやって血色のいい顔をしろというんだ？

「これは先ほどからの疑問にまずお答えしたほうが良さそうですね。またもや、心を見透かすようにフーレイが言った。

しかし、その後の彼の言動は、まさにそれらを憶測から確信に変えた。

「簡単に説明しましょう。私は生まれつき、人の記憶を見る…いや、正確には取り出す力があるんですよ」

「記憶を…取り出す？」

「ええ、相手を見るだけでその相手の記憶を自由に取り出し、見ることが出来ます」

にわかには信じがたかったが、それが真実とすればここまでの話は全てつじつまが合う。

「実際、うれしいですよ。殿下のような善人相手なら、私も気兼ねなく秘密をお話できる。今日は実に気分がいい」

「相手をしている方としては、必ずしも同じ気持ちではないがな」

「それも分かっています。ご気分を害されたことについては心からお詫びしますよ。でもね、本当に滅多にあることではないんですよ、こんな機会は。私のような者が心を開け放って語れることなんて。

だから、殿下には大変申し訳ないですが、今しばらく私の話にお付

き合いしていただきたいのですよ」

正直、迷いは強かった。だが自分自身、いくばくかの好奇心をそそられたのか、結局アモンはフューレイの申し出をししぶり承し、この奇怪な男の話にしばし付き合うことにした。

「細かく申し上げますとね、私は他人の記憶を出し入れできるんです。取り出すもよし、また入れ直すもよし。しかも、取り出した記憶は当人からは失われ、しかもその記憶は他人にも与えることが可能なんですよ」

「まるで人の頭を本棚扱いだな」

「比喻としては素晴らしいですね。まさしく、そうしたことを人の記憶に対して行える力が私にはある。殿下に対して使う前にも、ほら、この森人。メイフレイルといいましたね。彼女の記憶も少々いじりましてね。おかげでこんなにぐっすりと寝ているでしょう？」

「！」

言われて、アモンは発作的にフューレイに拳を向けた。

が、その手は目的の相手に到達する前にアルバインによってさえぎられた。

彼女の左手はまるでアモンが殴りかかることを想定していたと思えるほどの素早さで、フューレイの鼻先に向かっていたアモンの拳を驚くほど柔らかに掴み止めた。

「ご無礼致しました」

アルバインは左手に握ったアモンの手を放すと、深く頭を下げ、またフューレイの隣に収まる。

一連の動作は流れるようだった。

「どうも誤解があるようですが、まあ落ち着いてください。決して彼女に対して危害となるようなことはしていませんよ。むしろ、助けたんです」

「人の頭をいじり回しておいて、助けたとはどういう理屈だ！」

なお憤慨するアモンを見ながら、それでもフューレイは冷静な、そしてどこか楽しげな口調を変えずに続ける。

「いいですか、彼女は今回の件でひどく恐ろしい体験をした。それは鮮明な記憶として残り、彼女に長く恐怖を与えることになったでしょう。しかし、もうその心配はありません。なぜなら、彼女が味わった恐怖の記憶は、私が丁寧に取り出しましたのでね」

ここまで聞いてアモンは急に冷静さを取り戻した。

「恐怖の記憶…、つまり彼女がオストウム達に襲われた記憶を取り出したと？」

「正確に言くと、取り出したのは体験した際の恐怖のみです。何をされたかや何が起こったかについてはちゃんと覚えています」

「そこまで細かくいじれるのか…」

「こう見えても私、仕事は丁寧なんです。雑な仕事はいたしません。ですから、彼女は殿下への感謝を忘れるようなことはありませんよ。そして、不埒な連中への怒りや注意もね」

話の全容を聞いてようやく落ち着いたアモンは、今にもフューレイに突っかかりそうな姿勢でいたのを改め、手近の椅子を引き寄せて腰掛けると、深い息を吐いて気持ちを落ち着かせた。

どうやら自分はこのフューレイという男に対する第一印象が悪すぎたようだ。

最初に彼の狂気を感じて以来、明らかに嫌悪感から物事を悪く取っていた節がある。

「そんな力があるなら最初にまず自分が悪人ではないことを私に伝えればよかつただろうに」

「いくら便利な力とはいえ、さすがにそこまで簡単にはいかないんですよ。私が悪人でないという記憶をどうして私が持っているんです。私には主観の記憶はあっても客観の記憶は無いんですよ？」

ああ、とアモンは力無くうめいて納得した。

「もちろん、その気になれば助手のアルバインから一時拝借した記憶で殿下を納得させることも出来ましたが、それでは半分騙しているようなものでしょう。殿下のような方にはそういう小賢しいやり口は使いたくありません」

「なるほど…。まあ、時間はかかったが、お前が悪人でないことは理解できたよ」

「それは良かった。大好きな殿下に嫌われるなんて悲しすぎますからね」

思いもかけないことを言われ、アモンは妙な悪寒が背筋を走るのを感じ、ぞっとした。

だが、いまだしっくりこないといった表情を浮かべるアモンをよそに、フーレイは相変わらず狂気の漏れる笑顔を絶やさなかった。

真実と別離

レムレスからの一行、フューレイとアルバインが城を辞することが決まったのはそれから少し後だった。

城の玄関にアモン、テオドール、アルバインが集まっている。

フューレイはメイフレイルの記憶について最終確認をするというのでしばらく三人は立ちんぼで玄関先に待たされている。

（仕事は丁寧にですよ）

部屋を出る際、フューレイの言った言葉が頭に残っていた。

「それにしても、一国の公爵を待たせるとはあいつもずいぶんな奴だな」

軽い嫌味を口にした瞬間、アモンの脳天をテオドールの拳が見事に打ち抜いた。

「お客人の前で失礼なことを言うものじゃありませんよバカ公爵」では主人の脳天を殴りつけるのは失礼に当たらないのか？

鈍く痛む頭をさすりながらそんなことを考えつつ、いつもの恨みがましい目でテオドールを睨んでいると、突然すいと自分の横にアルバインが寄ってきた。

「重ね重ねのご無礼は真に申し訳なく思っております。ですが、私の主にもそれなりの事情がございますれば、なにとぞ平にご容赦を」
「事情ねえ…。人の頭を好きにいじり回す奴にどんな酌むべき事情があるのかね」

「それについて少々お話が…」

急にアルバインはささやくような声で話し始めた。

「主はわざと語らずにいましたが、あの力には大きな問題があるん

です」

「問題？」

「考えてみてください。主は人から記憶を取り出し、そして見る…いえ、というよりそれはもはや実際の体験として感じるようなものらしいのですが、それを主はすでに何百もの者たちに行っています」

「ふむ」

「つまり、主は他人の感じた痛みや苦しみの記憶を数え切れないほどその身に蓄えていらっしゃるんです」

そこまで聞いて、アモンはにわかに目を見開いた。

「それは…、つまりあいつは、人の苦しみをそっくりそのまま自分で肩代わりしてるってことか？」

「まさしく」

言いながら、アルバインは自身の右手を差し出した。

「私のこの右手は数年前の亜人狩りに掛かったとき、暴漢たちに切り落とされたらしいのですが、それについての一切の記憶は私にはありません。思うに、主がそれを肩代わりしてくれていなければ、私はきつと正気を保っていられないでしょう。当然ながら加えて私と同様の者たちの幾多の記憶…。主はとても普通の人間には耐え切れないほどの苦痛に満ちた記憶をそれこそ数え切れないほどに抱えて生きておられるのです」

絶句した。

そして、彼の目に宿る狂気の理由も容易に知れた。

当たり前だ。人は自分自身の苦しみだけでさえ耐え切れずに潰されることもあるというのに、あの男…フューレイはそれを何倍、いや何十、何百倍と背負い、なおもその手を止めない。正気を保っているだけでも奇跡とさえ思える。

アルバインの話聞き、説明しがたい感情にアモンが戸惑っていると、ふと静かにメイフレイルの部屋の戸が開くのが見えた。

「いやあ、お待たせして申し訳ない」

声こそ快活な明るさを響かせていたが、その表情は相変わらず狂気を含んだ笑顔で満ちていた。

「少々手間取りましたが、もう何も心配要りません。あとは彼女の傷が回復するのを待つてから、改めて別の使者を差し向けますので、今しばらく面倒をお許しください」

フューレイはアモンとテオドールに丁寧に一礼すると、まるで何事もなかったかのようにすでに開け放たれたままになっていた玄関からゆっくりと外へ向かった。後にアルバインが影のようにしたがう。

「おい、フューレイ！」

堪らずアモンは声をかけた。

「その…、さっきは色々とすまなかったな…」

振り返ったフューレイは、全てを察したように、いや、恐らくは察しているのだろう。ひと際大きな笑顔を見せる。

「やっぱり貴方は良い人だ。お会いできて本当にうれしかったですよ」

「下らん世辞はいい。それより、お前は自分のことも少しは心配しろよ」

アモンには珍しい気遣いに横にいたテオドールが驚いていると、フューレイはクスクスと笑った。

気のせいかな、その笑いは狂気を孕んでいないように思えた。

と、フューレイは急に耳の辺りにかかった髪を指ですき上げると、軽く隠れていた耳の先端をあらわにした。

その形はまさしく人間のそれと同じ、丸く小さな耳だったが、その輪郭に沿って傷の縫い後が明瞭に見て取れた。

明らかに元あった耳を形成して切り落とした後である。

「混血児の（業）というやつですよ。それでは、お元気で」

アルバインを伴って城門へと向かい、背を向けたフューレイは、それから姿が見えなくなるまで二度と振り返ることは無かった。

そして、アモンとフューレイも、その後二度と会うことは無く生涯を終える。

互いの願いが叶うことを祈るのはたやすい。
だが、残酷な世界に優しい神はいない。

知らず、空を灰白色の雲が大きく包んでいた。

風邪と悲鳴

風邪は万病の元という。

これは風邪にかかるほどに抵抗力が落ちている体は、他のあらゆる病原体にも防衛機能が手薄になっていることを示す極めて優れた格言である。

そしてここに一人、その風邪にかかった人間がいる。

日ごろの不摂生が祟ったのか、それともここしばらくの寒空が身にこたえたか。なんにせよ、彼がいつものベッドで熱にうなされている事実は変わらない。

「テオドル…、ユキマトイのチンキをもう一さじくれ。体が辛くてかなわない」

「ダメです。もうとつくに今日の分は飲んでしまったでしょうに。これ以上飲んだら逆に体に毒です」

ユキマトイはその名の通り、凍土に根付くウコギ科の多年草である。肝疾患にも用いられ、発汗作用が高く、解熱鎮痛効果もあることから、風邪の治療にもよく利用される。

「知った風な口を…。いいか、私は薬草学については…」

「人の無学を利用して丸め込もうとしても無駄ですよ。ユキマトイについてはアルセイデスからしっかり話を聞いてます。おとなしく明日まで我慢なさい!」

「くっ…、アルセイデスめ。余計なことを…」

アモンは熱と漠然とした全身の辛さに苦しみながら、信頼する庭師

の行為を手前勝手に呪った。

「ほら、頭を上げてください。水まくらを交換しますから」

そう言われ、だるそうに頭を持ち上げると、テオドールは熱ですっかりぬるくなった水まくらをどかし、新しいものと入れ替える。

再び頭を下ろすと、アモンはひんやりとした感覚に一時の安息を得た。

「全く、バカは風邪引かないって言葉もあるのに。変なところで例外作るから、こっちはいい迷惑ですよ」

「…お前な、いい加減にしないと本当に…」

うめくように言ったその時、急に寝室のドアを開け、アルセイデスが顔を出した。

「殿下、お加減はいかがですか？」

「…おかげさまで最低最悪だ」

子供じみた嫌味を吐くアモンを見て、アルセイデスは逆に安心した。こんな口がきけるならそう大したこともないだろう、と。

「あ、それからテオドールさん。スズタケ、とりあえずこれだけ摘んできました」

見ると、アルセイデスは脇に抱えたかごの中に、なにやら野菜を大量に持つてきていた。

「ご苦勞様。これだけあれば三日分くらいはスズタケのスープが作れるわ」

「スズタケ！」

その名を聞いて、アモンはかすれ声を振り絞るように叫んだ。

スズタケは比較的温暖な土地に生えるセリ科の野菜である。竹のような外観で、折ると中の水分が硬質の繊維にぶつかって鈴のような音を出すことからこの名がついた。身は繊維が硬く、食べることは出来ないが、煮詰めると粘り気のある汁が染み出し、これを食用とする。栄養豊富で消化によい他、血液の浄化作用があり、胃腸の弱

った人の病中、病後食としてよく食される。

「何をやってるんだアルセイデス、そんなものさっさとどこかに捨てて来い！」

アモンは必死に半身を起こすと、怒りと焦りの入り混じった声を絞り出す。

「バカ言ってるんじゃないよ、せっかくアルセイデスが苦勞して摘んできてくれたのに。大体、これを捨てたら一体何を召し上がるって言うんです？」

「食事など取らなくても、薬草と酒さえ飲んでいればこんな風邪はすぐ治る！」

「そんなこと言って、普段からまともに三度の食事も取らないからこんなことになったんでしょうが！」

テオドールの一喝を受け、アモンは倒れこむようにベッドへ体をうずめると、なおぶつくさと不満をつぶやき続けた。

「…食わんぞ、絶対。そんなもの…絶対食わんぞ…」

場の空気を察してか、それともベッドに丸まる主人の背後へ拳を振り上げるテオドールを見てか、アルセイデスは無言で寢室のドアを閉じると、そそくさと台所へ摘みたてのスズタケを置きに向かう。

そして廊下を渡り、階段の辺りに来たところで、寢室のほうから短い悲鳴が聞こえた。

「…ほんとに、テオドールさんも病人を怪我人にしてどうする気なんだか…」

脇に抱えたかごを持ち直しつつ、ひとつ大きなため息をついたアルセイデスは、そのまま階下へと下りていった。

介抱と疑問

「眠れない……」

すでに同じことをアモンは十回以上も口にしていた。

テオドールに無理やり食べさせられたスズタケのスープに対する吐き気はすでになくなっていたが、日が落ちてから急激に上がり始めた熱の影響で、意識は朦朧としつつも、苦しさが増える身体は一向に睡眠を許してくれない。

「いいから目を閉じててください。時間が経てば自然と寝付けますよ」

新しい水まくらを用意しながら、テオドールが答える。

アルセイデスによれば、恐らくこの熱が峠らしい。

今日一晩寝れば、明日にはほぼ回復するだろうと。

無論、アルセイデスの見立てに疑問があるわけではない。

しかし、今までに見たことも無いほど弱りきったアモンを見て、内心は心配であるのも事実だった。

時間はとうに深夜を回り、日をまたいだというのに、症状は一向に改善する様子は無く、寝室にはアモンの苦しい早い呼吸音が響いていた。

もはや自力で頭を上げることすら出来なくなったアモンの頭を持ち上げ、水まくらを交換する。

替えの水を汲みに台所へ向かう際、ふとアモンの側を離れることを不安に感じている自分に気づいた。

単純に疑問だった。

あんなバカ公爵がどうなろうと、自分の知ったことではないはずな

のに。

あのバカがもし、どうにかなったとしても、自分は以前の暮らしに戻れば済むだけのこと。そう考えていたはずなのに…。

はっとして、テオドールは自分の疑問を振り切るように強くかぶりを振った。

疲れた。それに寝不足も原因だろう。こんな妙な考えを起こすのは、きっといつもと違うこの状況のせいだ。

「なんでもない、なんでもない…」

まるで自分自身に言い聞かせるようにつぶやくと、テオドールは台所の戸を開けた。

告白と安息

深夜を大分回ったところ、いまだ寝付かぬアモンの呼吸は、それでも少し落ち着いてきたように聞こえた。

が、依然目をかすかに開いたまま、虚空を見つめている。

汗の浮き出た額を拭おうと、テオドールは水をきつく絞った布を持つて手を伸ばした。

と、急にアモンはうつすらと開けていた瞳を大きく見開いた。

「…テオドール、私は何故たった一人なのか分かるか？」

突然、何の前触れも無く話し始めたアモンに、テオドールは始めこそ驚いたが、これも熱からくるうわごとの一つだろうと、ベッド脇に椅子を置き、話を聞き始めた。

「わかりません。何故なんです？」

「私にも父母や兄弟はいたんだよ。もうずいぶん昔になってしまいがね。モルガン家の先代当主だった父のオーギュスト、母のナサニエル、姉のイーヴリン、弟のデュカス。私がまだ十歳のころまでは、我が家は五人家族だったんだよ。それが…」

途切れた間をそのままに、テオドールは黙って主が再び話し出すのを待った。

「…十六年前のあの戦争さ。隣国のトリアノスとのバカげた戦争…。この国は結果として戦勝国となり、トリアノスを併合してより強大になったが、それに対して私は何を得たと思う。貴人の務めとして最前線で戦った父上は亡くなり、私は十歳の若さで公爵家を継ぐことになった」

アモンはゆっくりと開いていた瞳を閉じてゆく。

「それからは最悪さ。戦後の混乱も収まらないうちに、ランカスタ侯爵家当主のオーウェンとの婚儀が決まった姉上は、ランカスタ一家へ向かう途中、賊に襲われて死んだ。細かいことは聞かせてもらえなかったが、なんにせよいい最期とは言い難いよな。そして続くように、弟のデユカスは生まれつきの心臓の病が悪化して急死。母上は心労のあまり倒れられ、ほどなく息を引き取った。これが二年間だ。テオドール、私は十歳からわずか二年間で天涯孤独の身となつたんだよ」

閉じられた目の横から一筋、涙が溢れた。

「私はねテオドール、公爵家なんか生まれたくなどなかったんだよ。高すぎる身分は人との距離を隔てる。結局、私は家族を失つて以来、数だけ多い家臣たちとの親密な関係など得られずに、まるで人の輪の中に取り残されたような生活を十年以上過ごしたんだ」

無意識にテオドールは右手でアモンの涙を拭った。目を細め、穏やかな、普段は決して見せることのない表情で、しばしアモンを見つめる。

「…テオドール、お前は…お前たちは、私を置いていたりしないよな…？」

わずかに首を横に傾け、再びかすかに目を開くと、アモンはテオドールを見つめながら言った。

「ええ」

テオドールは静かに答える。

「私たちが貴方を置いていくわけが無いでしょう。心配しないでいいんですよ」

わずかに濡れたアモンの頬を、テオドールが優しく撫でた。

「貴方はもう一人になんてなりませんよ…」

その言葉を聞き終わると、アモンは再び目を閉じた。

いつしか呼吸は安らかな寝息に変わり、外は夜明けを間近に、藍色に染まる。

目覚めと二度寝

昼を大きく回ったころ、アモンは目覚めた。

昨日までのとてつもない苦痛がうそのように、今朝…ならぬ今日の昼はすこぶる体調がいい。
体のふしぶしがなんとなく痛むことを除けば、熱も下がり、頭もすつきりと晴れやかである。

（それ見ろ、たかが風邪なんぞ私の回復力からすればこんなものだ！）

昨日まで晒してきた自らの醜態は棚にあげ、アモンは意気揚々と起き上がるうとした。

起き上がるうとした…が、
胸の辺りに大きな圧迫感…というより重量感があり、身が持ち上がらない。

どういうことだろうと不思議に思い、あごを引いて自分の胸元を見て愕然とした。

テオドルが椅子に座ったまま、上半身を覆いかぶせるように、自分の胸の上で寝ている。

自身の腕まぐらで気持ち良さげにぐっすりと眠っているその姿を見て、アモンは混乱した。

（…これは一体何事だ…？）

いかにしてこのような経緯となったのか、記憶を必死に辿ってみるが、驚くほど何も思い出せない。

昨晚、一体何があったのだ？

上げていた頭をまくらに落とし、しばし冷静に考える。が、やはり

全く記憶が無い。

「…大丈夫です。心配いりませんよ…」

寝顔に笑みを浮かべながら、テオドルがなにやらつぶやく。どうやら寝言と思えるが、これまた何のことやら意味不明だ。

「…」

考えを尽くした結果、アモンが導き出した結論は、

（もう一度寝よう…）

静かにまぶたを閉じた。

昼食と書簡

「どうしたんです。珍しく真面目くさった顔して」

昼食の支度を終えたテオドールが、テーブルについたアモンに訊ねる。

珍しいという点においては、今朝…もとい昼の出来事もまた十分すぎるほどに珍しかった。

まず、普段なら夕餉の一食しか一日に取らないはずのアモンが、今日に限って何故か昼食を要求したこと。

そしてもう一つ、

この辺境に追いやられて以来、初めてどこぞからの書簡がアモン宛に届いたことである。

アモンはテオドールの質問を完全に無視し、届いた書簡にくまなく目を通していた。

「…お忙しいところ申し訳ありませんがね、その書簡がどれほどか大切な内容だというなら仕方ありませんが、そうでないならさっさと食事を済ませていただませんか？」

テオドールの物言いが明らかに怒気を帯びたのに気づき、アモンは慌てて書簡をテーブルの隅に置くと、並べられた食事に手をつけ始めた。

今日の昼食は切り分けられたパンに野草と玉ねぎのサラダ、川魚の塩焼き、チーズのポタージュと、至ってシンプルだったが、昼食としては十分な品数であった。

サラダを口にすると、野草の爽やかな風味に、水に晒した玉ねぎの

食感がシャリシャリと心地好い。

「それにしても、そろそろ過ぎやすいのを通り越して肌寒くなってきましたね」

独り言のように話すテオドールに相槌を打ちながら、チーズのポタージユにパンを浸して口に入れる。やはりパンとチーズの相性は格別だ。

続いて熱いポタージユを直接一口すると、なるほど体の芯が温まる感覚が染み入るようで、ほっとした気分させる。

「ところで」

「？」

ちょうど川魚の塩焼きにかぶりついたところでテオドールの質問が来た。

「その書簡、一体なんの知らせです？」

「ああ、まあ大したことじゃないんだが…、ん、この川魚、塩のほかに何かかけたか？」

「余った玉ねぎを搾って汁をかけました」

「これはいい。うん、魚も脂が乗っていて実にうまい」

「ではなくて、書簡の話です。それと、口にもものを入れたまましゃべるのはお止めください」

人が食べている最中に話しかけておいてその言い草はなんだと思ったアモンだったが、ここは腹を立てても仕方が無いと観念し、口の端についた魚の脂を拭くと、書簡の内容を説明し始めた。

「ガストン伯爵家が爵位と領地、財産を剥奪されたとさ」

「ガストン…？」

「あー…、前にうちに来たオストウムって男は覚えてるか？」
はっとするようにテオドールがうなづく。

「オストウム・ヴィリエル・ガストン伯爵が正式な名だ。どうやら品行宜しからずというのが理由らしいが、まあ、あれだけバカをやつてれば当然か」

言いながら、テーブルの隅に置いた書簡をテオドールに渡した。

「…こんなもの渡されても私、字なんて読めませんよ」

「そうじゃない。そんなものはさっさと処分してくれってことだ。ほれ、暖炉にくべてしまえ」

アモンに促され、テオドールは多少の躊躇の後、暖炉に書簡を投げ入れた。

「ふむ、これでさっぱりしたな」

「はあ…」

「うん？」

「虚しいものですね。いくら身分が高くても、明日はどうなるかなんて分からないんですから」

「お前にしてはさういふんと感傷的な意見だな。珍しいこともあるもんだ」

にやつきながら言うアモンに気分を害したのか、テオドールは意識的に目を合わせないようにして食器を片付け始めた。

「おい、ところで林檎酒はどうした。食事が胸の辺りでつつかえてるぞ」

「今、お茶の用意をいたしますので、しばらくお待ちを」

「いや、そうじゃなくて林檎酒…」

「昼間からお酒を召すのは感心しません」

そつばを向きながらそう言い残し、テオドールは盆に載せた食器を持っていそいそと部屋を後にする。

ドアの閉まるのを見届けながら、アモンは不満げな表情を浮かべると、ふと、暖炉のほうへと目をやり、まだ燃え続けている先ほどの書簡をうつろに見つめた。

一変して、表情はどこか憂いを帯びている。

「…私も首くらいは洗っておいたほうがいいかもしれな」

暖炉の火に目を染めながら、ぼつりとつぶやいた。

庭師とマンドレイク

お茶を飲み終えたアモンは、腹ごなしといつもの日課を同時に済ませようと森へと向かうことにした。

「おや、殿下。今日は少々ゆっくりですね」

普段でも十分すぎるほどゆっくりだが、今日は食事を取っていた関係でおのこと散歩の予定が遅れ、すでに日はわずかながら西に傾いている。

「私だつてのんびりしたい時もあるんだよアルセイデス。ところで最近は妙なものは植えていないようだな。感心なことだ」

アモンの言葉を聞くや、何故かアルセイデスは微妙に主から目をそらした。

「…アルセイデス？」

「ははは…」

「はははじゃない。なんだ、何かあるならはつきり言え」

しばらく何事か考え込んだ様子のアルセイデスは、思い切ったように話を切り出した。

「実は、ちょっと珍しいものを植えたいと思っていたんですが、それが、その、ちょっとです…」

「いいからはつきり言え。別にまだ植えたわけでもないだろうに、私だつてむやみに腹を立てたりせんよ」

「いえ、もう植えてしまつたんです」

アモンはしばし無言でその場に固まつた。

「…分かった。済んだことは仕方が無い。それについては別に話すとして…、だ。アルセイデス、何を植えた。一体何を植えた！」

冷静に話していたはずのアモンだったが、徐々に理性が感情に押され、最終的にはすでに半分怒鳴り声に近くなっていた。その様子に、さらに口ごもるアルセイデスだったが、最後は観念して一言、

「マンドレイクです」

つぶやくように答えた。

アモンは先ほどよりも長く、無言で硬直した。

「マンドレイク…」

植物についての知識ではアルセイデスに劣ることは自覚しているアモンでも、さすがにマンドレイクについての知識はあった。

マンドレイク。スイレン科の多年草。毒性が強く危険だが、実の部分には麻酔、催眠作用。根には強力な治癒能力促進、強壮作用のある薬草のひとつ。

ここまではいい。

ここまでは今後、薬草として有用な使い道が存在するのは自分にもよく分かる。

しかし、マンドレイクはそのあまりの特殊性から、その薬草としての有用性をもつても一般的には一切扱われていない。

それは、

「抜いたら死ぬんじゃないのか…？」

この理由ゆえである。

「…ですね」

苦笑いのアルセイデスが答える。

アモンはひと際大きく息を吸い込むと、まるで堰を切ったように思いのたけをぶちまけた。

「ですねか、ですねってことは抜いたら死ぬわけだな。ああ、知ってるさ、マンドレイクは抜いたら死ぬなんてこと、薬草学の初步の

初歩だからな。でだ、なんでその抜いたら死ぬなんてものをわざわざ植えた？というか、なんで抜いたら死ぬものをお前が持ってた？いや、それ以上になんでせっかく抜けてたマンドレイクをもう一度植える必要がある？自殺か？自殺願望でもあるのか？一体誰が得するんだ！」

その日、結局アモンは日課の森の散策に出かけなかった。代わりに、城の庭園には日が暮れるまでアモンの尽きること無い雑言が響き続けた。

応接室と対策会議

マンドレイクは特殊な薬草である。

その希少性もさることながら、その効能の高さから利用しようとする薬学者は後を絶たないが、いかんせんその採取法が問題だった。

マンドレイクは根を土から引き抜く際、毒性音波という不思議な音を発する特性がある。

毒性音波はその名の通り、いわば「音の毒」とでも言えるもので、その音を聞いた者は鼓膜、中耳、内耳を経て、果てには側頭葉から脳全体に毒素が浸透し、最終的には脳全体の機能不全によって死を迎える。

そしてこの「音の毒」のもっとも厄介な点は、普通に耳を塞いだり、もしくはなんらかの理由で耳が聞こえなかったりといった者にも関係なく作用する点である。

よって、過去に行われたいくつかの実験によって実証されている説によれば、マンドレイクの発する毒性音波の可聴範囲となる半径約五十八ヤード以内に存在する生物はその音の発生から二十秒以内に確実に死亡する。

ちなみに音の持続時間は平均して一分前後である。

ただし、その毒性は人間などの高度な脳を持つ生物に限定されるため、一部では特殊な生物兵器としての研究も進んでいるという噂もある。

さて、

そうした理由から極めて危険な薬草であるマンドレイクがアモンの庭園を彩ったその日の夜、城の一階応接室では主人と従者と庭師による緊急対策会議が開かれていた。

「いいか、私は別に済んだことをくどくど叱りつけたいわけではないんだ。大体そんなことをしてもあの厄介なものが私の庭から消えてくれるわけではないからな」

テオドールの入れたお茶を飲みながら、テーブルに頬杖をついたアモンは、日のとづくに落ちた今となっても、なおしつくくアルセイデスに説教を続けていた。

「すみません」

すっかり意気消沈したアルセイデスは、ただアモンの言葉の切れ切れに謝罪を挟み込むのがやっとであった。

「全く、いつものこととはいえ、お前はあまりにも妙なものを庭に植えすぎる。しかもよりによって今回は命に関わる代物だぞ。考えるのも嫌だが、もし今あれがどこぞのバカに間違つて引き抜かれてもしたら……って、おい、テオドール。なんでこんな時にお茶なぞ出してるんだ。普通は酒のひとつも用意するだろうが！」

アモンの怒りが藪睨みにテオドールへ飛び火したその瞬間、テオドールの手に持たれていた金属性の盆が風を切つてアモンの後頭部を直撃した。

「ねちねちと何の解決にもならない文句をいつまでしゃべってるんですかバカ公爵。それ以前に大の男がくだらないことで取り乱してるんじゃないませんかよ！」

明らかに一瞬意識が飛んだアモンは、星の飛び散る視界にかろうじてテオドールを捉える。

が、いまだ焦点の定まらないその瞳は、見事にへこんだ金属製の盆までは確認できなかった。

「で、バカ公爵のことは放っておいて、実際のところどうなのアル

セイデス。何か解決策があるんでしょう？」

ゆつくりと右回転で揺れるアモンを無視し、テオドルがアルセイデスに訊ねる。

「はい、それはもちろん、対策無しであんなものを植えるわけにはいきませんから」

「やつぱりね」

思った通りという顔でテオドルが話す。

「どうせこのバカ公爵がしつこくまくし立てるもんだから、言い出すきっかけが掴めなかったんでしょ。ほんとにこの慌て者ときたら……」

「いえ、まず先に対策について話さなかった私が悪いんですから」

「変に庇ったりするとこのバカまた調子に乗るからやめなさい。それより、とりあえずその対策についてちゃんと話してくれる？」

「はい、それがですね……」

夜の緊急対策会議は主人不在で着々と進行していった。

公爵と賊

「…ほんとにこれで大丈夫なのか？」

テオドールの一撃からようやく回復し、アルセイデスのマンドレイク対策が完了した後も、アモンはなお疑念を抱かずにいらなかった。

何故なら少なくとも自分の知る限り、マンドレイクの毒性音波に対する対策などまだ発見されていないはずだからである。

「大丈夫です。信用していただくしかありませんけど、これで本当にマンドレイクについては心配無用です」

アルセイデスには珍しく、断言する口調であった。

「まあいい。というより、信用するより他に選択肢なんて無いんだしな」

不満と不安を緋い交ぜにした表情でアモンが言う。

すでに応接室での対策会議と対策自体は深夜にまで及んでいた。

「さて、それじゃあこれにて今日は解散とするか。テオドール、アルセイデス、お前たちも早く寝ろ…」

「しっ！」

突然、アモンの言葉をさえぎり、テオドールが周囲を探るようにつくりと首を動かし始めた。

「…といっても、目は動いていない。耳をすませ、何かを聞き取ろうと集中している。」

怪訝そうな顔で、アモンが今にも再び口を開きそうになったその瞬

間、テオドルが叫んだ。

「賊です！」

テオドルの声にまるでかぶさるように、応接室の戸が乱暴に開けられ、四人組の覆面姿の男たちがそれぞれに剣を持ち、床を踏み鳴らして室内になだれ込んできた。

四人組は全く迷い無くアモンに向かって突進してくる。

「殿下！」

アルセイデスがアモンに向けられた四本の剣のうち一本を己が身で防ごうとしたその時、アモンはそのアルセイデスを肩で押しのけると、まさに今自分の座っていた椅子を蹴り飛ばし、賊たちの足を一瞬止めた。

「二人とも、さっさと逃げろ！」

叫びながら、転がるように暖炉へ飛び退ったアモンは火掻き棒を手にすると、テーブルを遮蔽物にして賊と距離を取ろうとした。

が、賊は二手に分かれてテーブルの左右からアモンへ向かってくる。

「公爵！」

「いいから外へ逃げろ、早く！」

鬼気迫る声で叫ぶアモンに、アルセイデスは決心して玄関へと走った。

しかし、テオドルはその場に留まって動かない。

「ったく、この分からず屋がつ！」

言い終わらぬうち、左右から迫っていた賊は、アモンへ一斉に剣を振り下ろす。

と、それを待っていたようにアモンは素早くテーブルへ飛び乗ると、一気に出口付近へ転がり落ちた。

するとすぐさま同じように賊がテーブルへ飛び乗る。それを確認す

るや、アモンは転んだ姿勢から床を滑るようにテーブルの下へ入ると、渾身の力を込め、押し当てた背中ではテーブルを押し倒した。

賊は一瞬にして全員が転倒し、アモンは出口で固まるテオドールの手を掴むと、強引に引つ張り、玄関へ向かう。

「あ、あの…」

「やかましい、今はただ走れ！」

玄関はアルセイデスカ、もしくは賊によってか、完全に開け放たれており、二人はドアを開ける手間無しに直接城の外へと走り出ることが出来た。

が、二人が玄関を出ようとしたその時、一人早くも追いついてきていた賊の剣がアモンへ向けて突き立てられた。

「後ろ！」

テオドールの言葉に即座に反応し、急に踵を返したアモンは、火掻き棒で賊の突きを打ち払う。

しかし、さらにその賊の背後から追いついたもう一人の賊の突き出してきた剣は、アモンの右脇腹を浅く切り裂く。

「くっ！」

浅い傷とはいえ、広い範囲で脇腹を切られたアモンは、苦痛と息切れでついにその場に膝を屈した。

すると最初に追いつき、剣を一度は払われた賊が、構えなおした剣を振り上げ、うずくまるアモンの首目がけて一気に振り下ろした。

（最期…これが私の最期か…、しまらない終わり方だ…）

背後のテオドールが何事か叫んでいるように聞こえたが、もはや内容を聞き取る力は残っていない。振り下ろされる剣の気配を感じつつ、アモンは覚悟を決めていた。

闇夜とマンドレイク

闇夜を切り裂くような悲鳴がアモンの城を包んだのは、すでに賊の剣がアモンの首にかかる寸前のことだった。

悲鳴？

誰の？

地面に視線を落としたまま、アモンは死を目前に単純な疑問を感じていた。

テオドールの声ではない。

かといってアルセイデスのものでもない。

では誰だ？

この絹を引き裂くような耳障りな叫び声は誰の…。

緊迫した状況のためか、ひどく不明瞭な時間感覚の中、アモンが疑問に囚われていると、突然、目の前で自分の首を狙っていた賊の足が膝から崩れた。

「大丈夫ですか、殿下」

妙に落ち着いたアルセイデスの声が庭の辺りから聞こえてきた。アモンは痛む脇腹をかばうように、ゆっくり上半身を起こす。見ると、追いついてきていた賊二人は、目の前で完全に事切れていた。続き、首を回して庭の辺りに目を向けると、アルセイデスが汗を滲ませた笑顔でなにやら手に持ってこちらを見ている。

マンドレイクだった。

一足先に庭へと逃げていたアルセイデスは、とっさにマンドレイクを引き抜き、賊を仕留めたいらしい。

「なるほど、お前のマンドレイク対策は本物だったか…」

「公爵！」

気づくと、背後にいたテオドールが目の前に回り込んでいた。

心配そうにアモンの顔を覗き込むその目は、今にも涙をこぼしそうになっている。

「何を泣きそうな顔をしている。賊はアルセイデスが始末した。もう心配はいらんだろ」

「でも、公爵…、その傷…」

「たかがかすり傷ひとつに大げさだというんだ。もしこの程度で死ぬとしたら、私はお前に殴りつけられるたびに死ななきゃならんだろうが」

言い終わらぬうち、テオドールはアモンに抱きついた。

「バ、バカ、放せ、傷が、傷が痛む…」

必死にテオドールを引き剥がそうとした瞬間、耳元のテオドールの口から嗚咽が漏れるのを聞き、アモンは抵抗を止めた。

マンドレイクの悲鳴はとうに消えている。

狂乱と玉ねぎ

アルセイデスのマンドレイク対策とは以下のようなものだった。

まず、土に埋まったマンドレイクに手ごろな太さの杭を差し込んで穴を開け、そこへ海綿を詰めて根の成分を吸わせ、それを抽出する。そしてそれにマンドレイクの実から採取したエキスを混合し、アルセイデスいわく「絶妙の希釈加減」で水溶液を作り、それを両方の耳の中に流し込む。あとは川や海から上がった時同様、耳の中の水を抜けば対策は完了であった。

「要は土から出さずにその成分を抽出すればいいだけのことなんです。すよ。そして、その成分は、言うなれば（毒をもって毒を制する）ための手段というわけです」

「今となつては納得だが、実際、結果が出るまでは肝が冷えっぱなしだったぞ」

ベッドに半身を起こしたアモンが言うと、アルセイデスは軽く一礼した。

昨晚の賊は、城内に侵入した四人以外にもう一人いたらしい。

アルセイデスの報告によれば、賊は二人が応接室から玄関へ向かう途中で、二人はアモンも分かっている通り、玄関の前で、そしてもう一人は城の外で息絶えていたという。

恐らくは城の外にいた賊は見張りか、もしくは賊のまとめ役だったのだろう。

「とりあえず、賊は全員まとめて森に捨ててきました。少し経てば狼や熊たちが綺麗に片付けてくれますよ」

「お前、私の散歩道に何でものを捨てて…、というか、お前どうやって賊どもの死体を…。いや、まあいい…」

相変わらず、この華奢な青年がいかにしてそのような力仕事を行っただかという疑問が頭をよぎったが、今回もまた疑問は胸に仕舞うことに決め、アモンは静かに横になった。

「ところで傷の具合はいかがですか？」

「言っただろう、たかがかすり傷だ。それに、マンドレイクの効果が知らんが、もうほとんど傷も塞がっているよ」

脇腹を軽くさすりながら、アモンは天井を見つめつつ答える。

「それにしても、あの賊は一体何者だったんでしょうか？」

「…」

「心当たりがありませんか？」

「無いさ。…いや、無いことにしておくのが利口と言っべきかな」

「まあいい。それよりアルセイデス、今度もしあんなことがあったら、私に構わずさっさとテオドールを連れて逃げろよ。あのバカは私の言うことをちつとも聞かんからな」

「あ、そういえば」

「なんだ？」

「テオドールさん、なんかしばらく殿下とは顔を合わせたくないって…」

「なんだそりゃ？」

「殿下、またテオドールさん怒らせるようなことしました？」

「勘弁しろよ…。全く身に覚えが無いぞ…」

そのころ、当のテオドールといえば、台所で一人食事の支度をしながら悶々とした気分さいなまれていた。

（バカ公爵に…、あのバカ公爵に抱きつくなんて…）

日ごろ以上にいつそう乱暴な手つきで玉ねぎの皮むきをしながら、テオドールは無意識に床を蹴りつけていた。

と、一瞬昨夜の記憶が鮮明によみがえる。

アモンの首元で不覚にも声を漏らして泣いた情景。

「あーーーーーっっ！」

理性の限界に到達したテオドールは、奇声と共に、今まさに剥いていた玉ねぎを台所の壁に向け、力いっぱい投げつけた。

汁を巻き上げ、玉ねぎが壁一面へ粉々に飛び散る。

二つの理由で頭に血の上ったテオドールが冷静さを取り戻すには、まだまだ時間がかかる。

森と野獣

「そろそろこの辺りも季節感というか、風情が出てきたな」

そんな独り言をしゃべりながら、肌寒くも澄んだ空気でしたしなむ忘れ草は格別だった。

アモンの日課である森の散策は最近、秋模様になった景色のおかげでより心地好さを増し、時に日が落ちてから帰ることも多くなっていた。

そして今日もまた、早くも五本目の煙草に手をかける。吸いかけの火を移して新たに煙を上げる煙草が、薄暗くなってきた森に螢のようにきらめく。

と、何気なく目を向けた木陰の先に、夕暮れの薄明かりを受けて光る二つの球体が見えた。

（鹿かな…？）

まだ距離があるせいもあり、始めこそそのんきにそんなことを思っていたが、それが徐々に近づいてくるにつれ、アモンは呆けていた顔を鹿爪らしく正し、その正体を見極めようと目を凝らした。

目の位置からして草食動物ではない。

仮に草食動物の場合、目から発せられる光はわずかに縦長の円を形成する。これは草食動物の目が顔に対して横向きに備わっているためである。

対して雑食、もしくは肉食動物の目は顔の正面に位置するため、綺麗な円を描く。

アモンは明らかに満月のような双眸でこちらを見ているそれから目をそらさなかった。

（視線を外したらまずい…）

すでにかかなりの距離まで近づかれていたこともあり、アモンは慎重に行動した。

まず、視線を合わせた状態で外側の視界を利用し、相手の全体像を確認しようと努める。

どうやら相手はかなり大きな狼のようであった。

距離が狭まるにつれてその正体はさらに鮮明になっていく。

が、ある程度の距離まで近づかれた時、アモンは相手の姿に動揺した。

姿かたち的大半は大柄の狼そのものであった。しかし、残りの部分アモンにさらなる不安と違和感をもたらした部分。そこが問題だった。

目の狼は、明らかに二本足で歩いていたのだ。

すでに口元まで火が迫った煙草に唇を火傷しそうになりながら、それでもアモンは視線をそらさず、ゆっくりと上着を脱ぎ始めた。額から頬へと流れる汗が垂れ、脱ぎかけの上着を濡らす。

アモンがもはやくわえ続けることを諦めた煙草の火を指でもみ消したその時、二足歩行の狼は恐るべき速さでアモンに襲い掛かった。

日の落ちかけた森の中、二つの影が激しく重なり合う。

公爵と裸夫

「それにしても遅いですねえ。日が落ちて迷子にでもなつてなければいいけど…」

アルセイデスは、台所でいつも通り不機嫌そうな顔のテオドルと話しながら、主の帰りを待っていた。

「まったく、こっちにだつて予定つてものがあるのに…。これじゃいつ料理に取り掛かれいいのか分かりやしない！」

天井からぶら下げた玉ねぎ入りの網袋をもてあそびながら、テオドルがこれまたいつも通りの不満を口にしたその瞬間、玄関の戸が開く音に混じつて、何か重たいものが倒れるような、こもった音が響いた。

先日の賊の襲来もあつて、一瞬警戒した二人だったが、そのすぐ後に聞こえてきた耳慣れた主人の声に安堵した。

「おい、テオドル、アルセイデス、ちょっと来てくれー」

二人は揃つて、小走りに玄関に向かう。

そして二人揃つて、その状況に目を丸くした。

アモンが丸裸の男に肩を貸すようにして、玄関先に座り込んでいたのである。

何故かアモンも男も全身土だらけで、加えてアモンは上着を右手にぐるぐると巻きつけている。よく見れば、上着はところどころに穴が開いていた。

「一体何事ですかこれは！」

テオドルが多少目のやり場に困りながらアモンに問うた。

「…森で襲われた」

主人の答えにテオドルとアルセイデスは再び目を丸くする。

「だが不思議なんだよなあ…。この男、確かに私へ襲い掛かってきた時は狼みたいなたんだが…」

土と汗まみれになりながら、肩で息をしていたアモンは、自分の連れてきた男を見ながら不思議そうにつぶやくと、

「…疲れた」

そう言って、玄関先に倒れこんだ。

対処と思惑

「リカントロープですね」

ベッドに横たわった男を見ながら、アルセイデスは納得したように言った。

一息つき、落ち着いたアモンも側で椅子から様子を見ている。

「リカントロープ？」

「獣狼人というほうが通りはいいかもしれませんね。簡単に言うと、変身能力のある亜人の一種です」

「なるほど、それで私に襲い掛かってきた時は狼のような姿をしていたわけか」

「ほら、ここを見てください」

アルセイデスが男の耳をつまみ上げる。

「リカントロープは人間の姿になっている際も、耳の先端に生えた筆のような毛によって判別が可能です。もちろん、剃ってしまえば全く見分けはつかなくなります」

「ふむ」

「しかしよくリカントロープに襲われてご無事でしたね。普通だったらあつという間に食い殺されますよ」

「噛み付いてくると分かっている相手なら、対処さえ間違えなければどうとでもなるさ。今回は、そのために上着に犠牲になってもらったよ」

アモンの話としてはこうである。

相手が肉食動物の場合、しかもその牙の届く範囲の最短距離に急所……例えばのど等がある場合、彼らは必ずそこを目掛けて牙を剥く。

そうになったら、間髪を入れずに相手の口に棒でもくわえさせるように腕を横に押し込む。その際、相手の首を抱え込み、出来るだけ口深くまで腕を押し込むのが大切である。どんなにあごの力が強い動物も、関節の間近を塞がれるとほとんど力を発揮できない。さらに、押し込めた腕によってのどを塞がれた相手は、それほど時を置かずに窒息する。

「で、ようやく気を失ったと思ったら、先ほどまで狼だった相手が裸の男になってた。正直、何かなにやらさっぱりさ」

「私からすれば、そんな男をわざわざ連れて帰ってくるもののほうがさっぱり分かりませんけどね」

いつの間にか部屋に入ってきていたテオドールが嫌味っぽい言葉を口にする。

とはいえ、これは当然である。

実際、自分を襲った相手を我が家に連れ帰る人間など聞いたことが無い。

「お前の言い分はよく分かるさ。ただな、どうにも気にかかることがあるんだよ。それをこいつから聞き出さんことには、どうにも寝つきが悪くなりそうだな」

「気にかかること…?」

「まあ、ちよつとしたことさ。お前たちが気にかけることではないよ。ところでアルセイデス、薬のほうは明日までは大丈夫なんだな?」

言われて、アルセイデスは男の額を軽く撫でながら答える。

「ええ、相当多めに飲ませておきましたから、恐らく朝までは持ちますよ」

「そうか、それなら安心だ。よし、お前たちはもう休め。後は私がやっておく」

その言葉にテオドールがはつきりと反抗した。

「何バカ言ってるんですか、相手は今こそ寝てますけど、凶暴なりカントロープなんですよ。それと二人きりなんて正気の沙汰じゃありませんよ！」

「心配いらんと言ったろう。ちゃんと対策もしてる。気にせず休め、ここからは私の仕事だ」

アモンの口調は穏やかだったが、その響きには断固としたものがあった。

結果、アルセイデスの説得もあり、テオドールはしぶしぶ部屋を後にした。

部屋にはアモンと、それを襲った男。

二人の長い夜はこれから始まる。

公爵と獣狼人

「…おい、いつまで狸寝入りを決め込むつもりだ？」

テオドルとアルセイデスか部屋を出てからしばらく後、アモンは腰掛けていた椅子をベッドの脇に移動させながら男に言った。

すると、男はゆっくりとまぶたを開け、横になったまま睨みつけるような目でアモンを見つめた。

「私が近づくのを待っていたか、それともあいつらがいなくなるのを待っていたのか。どちらにせよ、まだ私を襲う気は十分のようだな」

「…」

挑発するようなアモンの言葉にも、男は無言で鋭い視線を送り続けるだけだった。

「自己紹介がまだだったな。お互い、出会った時はやたら忙しくってそんな暇は無かったから仕方無いが…。私はアモン・ハイラッド・モルガン。モルガン公爵家の当主だ。お前の名は？」

「…腐れ貴族なんぞに名乗る名など無い…」

男が始めて声を発する。

「二度目の対面にしてはずいぶんな言われようだな。ま、悪口にはうちの従者のおかげで慣れてはいるがね」

瞬間、男は突然ベッドから起き上がると、アモンの首元に両手を伸ばした。

が、その動作はひどく緩慢だった。

「無理をするな。お前に飲ませた薬はうちの庭師が調合したとって

おきだ。狼になることはおろか、体を動かすのもやつとだるうに」

「…畜生が…」

「理由の分からん恨み言に貸す耳は持ち合わせていない。話すならものの順序を考えて話せ。何故私を襲った。というより、何故私をそんなに憎む？」

「貴様がクソ貴族という以外に理由がいるか…」

ベッドに上半身を起こしながら、男がうなるように言う。

「つまりは貴族嫌いか…。さて、それではさらに細かい質問だ。では何故貴族を憎む？」

「貴様は…貴様らは、俺たちをまるで獣でも狩るように弄び、そして殺す。だから、俺は殺される前にお前らを殺すんだ…」

「そりゃまたたいそうな理屈だな」

「貴族は全て俺たち亜人の敵だ…。先に仕掛けたのは貴様ら貴族どもだ…」

「そう思う根拠は？」

「…真実だ。奴らが教えてくれた…」

「奴らとは誰だ。誰にそう吹き込まれた？」

「…」

男は再び口を閉ざした。

「だんまりか…。それならそれでいい。無理に聞き出そうとは思わんさ。それに、お前の言い分通りのろくでもない貴族も実際にいるのは事実だしな。だが」

急に厳しい口調でアモンが問う。

「十把一絡げに私までクソ貴族呼ばわりされるのは納得いかん。少し考えてみる、お前が言うところの腐れ貴族というのは、亜人とあも親しくするものなのか？」

「…自分の立場を利用して、いいようにこき使ってるだけだろう」

「否定はせんさ。確かにあいつらと私は主人と従者の関係だ。とし

てもだ、自分で言うのは少々面映いが、普通、お前の思うような手合いの主人の身を、危険を心配するような言葉を、虐げられている従者はかけたりするか？」

「……」

またも男は押し黙ったが、今度の沈黙は明らかに言い返す言葉が見つからぬための沈黙だった。

「信用するしないはお前の自由だ。勝手にするがいいさ。ただ、私は相手が人間だろうが亜人だろうが、平民だろうが貴族だろうが、そんなことを気にしたことは一度も無い。私が気にするのはただひとつ。相手がいい奴か、それとも下衆かということだけだ」

言い終わると、アモンは椅子から立ち上がり、窓の外に明るく照らし出された月を見つめた。今宵は十六夜。満月に負けず、月光は眩しい。

「夜が明けたら、朝一番でレムレスに書簡を送ろう。あそこならお前の居場所もあるだろうよ」

「！」

驚きを隠せぬ顔をし、男は目を細めた。

「別に親切心からじゃない。ただな、お前を焚きつけて私を襲わせた奴らは、間違いなくお前を始末しようとするだろう。ま、お前がどうなるうと知ったこっちゃないが、事がそいつらの思惑通りに運ぶのが気に食わないのさ」

アモンはひとつ大きな伸びをすると、釣り合わない小さなあくびをしながら部屋を出ようとした。

すると、

「……相手の名前は分かん。名乗らなかった。ただ、お前がこの辺りで亜人狩りをしていると聞いただけだ」

男の言葉に振り返ったアモンは、苦笑いしながら答える。

「レムレスに着いたらメイフレイルっていう森人に会うといい。私

が襲った側ではなく、助けた側だったことを、彼女なら話してくれるだろうよ」

一瞬、男は大きく目を見開き、少し考え込むような素振りをすると、つぶやくように言った。

「…ガトック…」

「？」

「俺の名だ」

「そうか…。ではガトック、ゆっくり休め。レムレスからの使いが来るまではここでのんびりするといい」

「…アモン」

「なんだ？」

「すまなかった…」

「はっ、くだらんことを言う暇があったらさっさと寝ろ。朝食を食い逃すぞ」

言い捨て、アモンは部屋を出た。

公爵と思索

次の朝、ガトツクの部屋に人影は無かった。

夜のうちに城を出たらしい。

テオドルとアルセイデスはあからさまに安心した様子だったが、アモンはひとり、憂鬱な気分だった。

アモンは決して語らなかったが、先日の賊による襲撃と今回のガトツクの件に関しては、ある程度の察しをつけていた。

オストウムの爵位剥奪に関しては明らかに差別派、擁護派に関係なく、亜人を出しにして反王勢力や中央議會を攻撃しようという算段が見え隠れしている。

そして、自分については公爵という身分から下手な手出しが出来ず、逆に直接的な手段で抹殺にかかっているのが明白だった。

裏で手を引いているのは恐らく執政院と元老院の連中だろう。奴らは中央議會が貴族院と人民院に実質牛耳られているのを快く思っていない。

ウェイデイが思うように丸め込めないもので、慌ててあの手この手を出しているんだろうが、そうした奴らの苦し紛れの策ひとつひとつがアモンにとって耐え難く不愉快だった。

自分を殺したいと思うのは別に構わない。

それはそれぞれの利害によって生じる仕方のない感情だ。だが、そのために駒として使い捨てられる者たちがいる。それが許せなかった。

政治ごっこで誰かが死ぬことほどバカらしいことはない。

ガトックが消えたその日、日課の森の散策に向かうと、アモンは無意識にガトックと出会った場所へと足を向けていた。

ちょうど彼と目を合わせた時に座っていた岩に腰掛け、あの時と同じように煙草に火をつける。

（ガトックが下手を考えずにレムレスに向かってくれてればいいんだが…）

今日も静かな森の中で紫煙をくゆらせながら、アモンは国境の方向を眺めながらそんなことを考えていた。

公爵と悲愴

「また書簡ですよバカ公爵！」

昼を過ぎてもまだベッドに横たわっているアモンに、テオドルがいつもの調子で声をかけつつ、届いた書簡で寝ぼけ顔の主の頬を叩いた。

「…テオドル、お前は礼儀とか主従関係というものを一体いつになったら学んでくれるんだ？」

「貴方が朝、まともに起きられるようになったら考えます」

いつものやり取りを交わしつつ、アモンは半身を起こして届いた書簡を開いた。

「テオドル、眼鏡を出してくれ」

「はいはい」

面倒そうに小物入れから取り出した鼻眼鏡を手渡す。

「…うん？」

「なんです？」

「中央でどうやら事件が…」

言いかけてアモンは急に押し黙った。

内容は極めて簡潔だった。

ベルディニオ中央議会において、白昼、執政官の一人が乱心した獣狼人の手にかかり殺害さる。

なお、凶行に及んだ獣狼人はその場にて警備兵たちにより速やかに殺処分。

この事件をもって、ベルディニオは亜人へのよりいっそうの警戒と監視、管理の強化を徹底することとなるだろう。

犯行に及びし亜人の人相と名は以下の通り…。

全てを読み終えたアモンは、書簡を手から滑り落とし、まるで空を掴むような姿勢で固まってしまった。

「…公爵？」

呆然としたまま動かないアモンの様子にただならぬものを感じたテオドールが声をかける。

「…すまないがテオドール、しばらく一人にしてもらえるか？」

目も合わせず、アモンは抑揚の無い声を発する。

「え…？」

「頼む…」

反論の出来る空気ではなかった。

押し黙り、足音すら殺してテオドールが部屋を静かに立ち去ると、アモンは眼鏡を外し、そっと小物入れの上に置いた。

瞬間、

両の目から焼け付くような感覚と共に涙が溢れ出した。

「…畜生、なんで…こんな…」

止まることの無い涙にぼやけた視界と呼応するように声はかすれ、火のように熱い胸の中で、音の無い叫びが虚しく響いた。

言い知れぬ無力感に包まれながら、ありとあらゆる負の感情が身の内側を蝕んでゆく。

「…どうして、どういつもこいつも、死ぬか…殺すことしか…出来ないんだ…」

うずくまるように丸めた背中が激しく震え、雨だれのような涙は尽きる気配が無い。

その日、アモンが寢室を出ることはついに無かった。

使者と日常

レムレス法王自治国から使者が訪れるのはフーレイと、メイフレイルの移送に当たった者以来、三人目であった。

「恐れ多くも殿下にお目通り叶い、恐悦に存じます。私はレムレス法王自治国亜人保護庁厳正亜人保護区監督官のダナンと申します」

「…長い」

「…は？」

「どうしてレムレスのお役人という奴は、誰も彼も長つたらしい肩書きなんだ？」

アモンの的確かつ失礼な指摘に対し、一瞬の間も置かずにテオドルのかかとかアモンの右足のつま先を踏み潰す。

見慣れぬ者にとって、その光景はなんとも奇妙に映るだろうが、椅子に座りながら苦痛に悶える主とそれを見下す従者にとって、それは極めて日常的な事柄であった。

ゆえに、こうした時もとも困惑するのは外からの来訪者と決まっている。

ダナンも見事に例外となることなく、目の前の異常な事態に戸惑いを隠せずにいた。

「…で、そのレムレスのお役人が私のような没落貴族に何の用事だ？」

いまだ引かぬ痛みに耐えながら、アモンは必死に平静を装いつつ、急な客人へ率直に問う。

「は、えーと…、実は殿下には折り入ってご相談があり、失礼を承知でこのように急遽馳せ参じた次第でして…」

「だから長い！」

今度の台詞の代償は、右側頭部への鋭い肘鉄だった。

かろうじて維持できた意識はよいとして、アモンは激痛と右耳の一時の難聴を余儀なくされた。

「…私も忙しい身というわけではないが、物事は出来るだけ簡潔に伝えてもらえるとありがたいんだがな」

気持ち、右側へ傾いたアモンを見つめながら、テオドールは何事も無かったように主の横に立ち続けている。

「…あー、そのですね、簡潔に申しますと、我がレムレスが進めております厳正亜人保護区の拡張を後押ししていただきたいことが一件。もうひとつは、ベルディニオにおける実質的な亜人奴隷制度の廃止を殿下からウェイディ国王陛下にお口添えしていただきたいという…」

「無理！」

きつぱりとしたアモンの返事に対し、かなり食い気味に放たれたテオドールの拳が主の後頭部を直撃したのはほぼ同時だった。そして、

従者の一撃を受けてテーブルへと崩れ落ちる主人の姿を、ダナンは生涯で始めて目撃した。

手紙と贈り物

「どうもレムレスの連中は私のことを異常に買い被っているふしがあるな……」

早々にお引取り願ったダナンのことを思い出しながら、アモンはいぶかしげに言う。

「買われないよりは買われるほうがましだと思いますけどね」
お茶を注ぎながらテオドールが答える。

「まず間違いなくフューレイの仕業だ。あいつめ、絶対私についてあること無いことレムレスで話しまくってるぞ」

「いい噂なんですから、そんな目くじらを立てたものの見方するもんじゃありませんよ。あ、そういえば」

「なんだ？」

「フューレイさんの助手をされてた……ほら、アルバインさん。ダナンさんが彼女からの手紙を預けていかれたんでした」

そう言うと、テオドールはポケットの中を探って一通の手紙を取り出した。

「何か大事なこともしれませんから、ちゃんと読んでくださいね」
「大事な内容ならこんな紙切れでよこすわけ無いだろ。全く……」

言いつつも、粗末な封筒の先を指で切り落とすと、中の小さな紙片に目を通す。紙の大きさに見合った短い文章。わずかに三行。

殿下の身边にわかに不穏の動きあり。

よくよくご用心を怠り無きよう。

ついては贈り物をお受け願いたし。

「…なんだこりゃ？」

「この前の賊のことですかね」

「だとすればもう事は済んでるだろう。それより、なんだこの贈り物って…」

「…もしかすると、あれのことでしょうか？」

言って指差した先には、件のダナンが置いていったいくつかの贈り物の木箱が並んでいる。

正確には箱は四つ。アモンはそれをひとつひとつ開けていった。

「こっちは銀食器が一式…、こっちはレムレス産の陶磁器か…、これは…おお、愛しきかな忘れ草。しかもこりゃグルフィアのルイス地方産じゃないか、極上品だぞ！」

「…バカ公爵。はしゃぐ前にもうひとつ」

「ん、ああ。これの中身は…」と

最後の木箱を開けた時、アモンとテオドールはアルバインの手紙の意味を嫌というほど実感した。

「なるほど…。身辺の用心のための贈り物…ね」

木箱の中身を確認しながら、アモンは無意識にため息をついている自分に気づくと共に、なんだか胃がきりきり痛むのを感じた。

「テオドール…」

「なんででしょう？」

「これ…、お前が持たない？」

「イヤです」

至極はつきりとしたテオドールの否定に、アモンはしばらく遠い目をせずにはいられなかった。

質問と失望

「あ、殿下。これからお散歩ですか？」

いつも通り、庭を回って城を出る途中でアルセイデスが声をかけてくる。

「ああ、…さっきの客人から極上の煙草をもらったんだ。ひとつ森の中でゆつくり堪能してこようとね…」

「…なんか、おっしゃっていることとお顔が合っていないんですけど…」

アルセイデスは引きつった笑顔で遠い目をしている主人を見てひどく心配になったが、それ以上に気になったのは、主人がやたら懐の辺りを手でまさぐっていることだった。

「殿下、その…胸の辺り、なんかあったんですか？」

「え、いや、何も無いさ。ああ、別に何ということは無いです…」

「はあ…、まあ何も無いのでしたら構わないんですが…」

全身から陰気な雰囲気漂わせつつ、アモンは城門へ向かう。

と、突然アモンは急に踵を返し、アルセイデスに向き直ると、妙な質問をしだした。

「アルセイデス、もし、もしもの話なんだが、先日の賊の一件、ああいったことがもしまたあったと仮定してだ、マンドレイクで賊を撃退するという方法はまた使えるかな？」

何故かは分からないが、アモンの瞳は淡い期待にきらめいて見える。

すると、いきなりの質問に始めこそ戸惑ったアルセイデスだったが、すぐに落ち着いて答え始めた。

「無理ですよ。あの時はそれこそ本当に絶体絶命という事態だった

からあんなことしましたけど、もし賊が来た時、城の周りに無関係な人がいたとしたらどうなります。罪も無い人をむやみに危険にさらすようなことはもう出来ませんよ」

否定の余地無き完璧な答えだった。

「…だな。そりゃそうだ。うん、いや、妙なことを聞いてすまなかつたな」

「別に構いませんけど、…殿下、ほんとに大丈夫なんですか？」

「大丈夫…。何事もないさ、うん。心配いらんよ…」

先ほどもさらにうなだれて城門へと向かうアモンの背中では、もはや哀愁すら漂い始めていた。

喫煙と虚無

森の散策、そしてそこでの喫煙は、アモンにとって一日を構成する要素の中でも特に必要不可欠なものである。

にもかかわらず、今日のアモンはそれらに対し、微塵も喜びを感じることが出来なかった。

正確には喜びを感じる余裕が無かったという表現が正しいだろうが、そうした表現の問題よりも、今現在アモンが抱えている、すなわち心の余裕を根こそぎ奪っている根本的原因が何よりも問題であった。

それは今、彼の懐にある。

あの変わり者のフューレイに助手として仕える義手の森人アルバインからの贈り物。

本来、それはアモンに安心を与えるべきはずのものだったが、人の価値基準というものはまさに十人十色である。

そして不運なことに、アモンの性格はその贈り物を心の拠り所とする性質ではなかった。

(…どっかに捨てちゃおうかなあ…)

これがせっかくの贈り物に対するアモンの偽らざる気持ちであった。

いつものように手ごろな岩を見つけて腰掛け、煙草に火を灯す。

贈り物のひとつであるグルフィアの煙草。

グルフィアは大陸中央部の農業が盛んな国で、特にその特産は大

陸一の品質と名高い煙草であり、さらに付け加えるならその中でも
グルフィア東部、ルイス地方で栽培されたものは別格の扱いとなる。
まさに煙草呑みにとって至高の一品を口にしながら、今日のアモン
はその喜びに浸ることが出来ない。

「…味が分かんらん」
自然に独り言が漏れる。

今のアモンにとっては、至高の煙草と生木の燻る煙との区別すらま
まならないかも知れなかった。
しかし、長年に渡って染み付いた癖の悲しさか、アモンは無為に極
上の煙草を燃やす作業を止められずにいた。

日は徐々に傾く。

だが、時間の経過とは一切比例すること無く、結局、日暮れを迎え
てなおアモンに安らぎが訪れることは無かった。

夕餉と急報

森から帰ってから、アモンの様子に変化は見られなかった。夕餉のテーブルについてさえ、うつろな表情を浮かべている。

今日のメニューは切り分けたパンと塩もみした野草に刻んだチーズを合えたもの、鹿肉にきのこ玉ねぎのシチュー、果物は林檍だけだが、くるみの砂糖煮があるので甘味の頭数は揃っている。

そして林檍酒。

さすがのテオドルも、あまりのアモンの憔悴振りに気を使っただが、最近には珍しく酒を食卓に出した。

だが、それでもアモンの気が晴れる気配は一向に見えない。

まるで流れ作業のように、並べられた料理を口に放り込んでゆく。

「お味はいかがですか？」

「…分かん」

一通りの料理を食べ終え、林檍酒で流し込んだ直後の、アモンの素直な感想である。テオドルは漏れそうになるため息を我慢し、無言で食器を片付け始めた。

と、その時、

日の落ちた城門から人の声が響いた。

「アモン公爵はおられますか！」

高く、澄んだ声。そして聞き覚えがある声。

アモンは今までのうつろさはどこへやら、急に椅子を立つと、一旦食器を置いて玄関へ向かうとするテオドルをすぐさま追い抜き、

矢のように廊下を抜けると、玄関を開けるのももどかしく、庭園に出た。

闇夜とはいえ、数多の星々が放つ光は城門の人影を判別するに十分だった。

「アルバイン！」

明らかに怒鳴り声で急な来客の名を叫ぶ。

「かような夜分、しかも急な訪問をお許しください。我が主よりの命でお訪ねいたしました」

「主って…、フューレイか」

「左様で」

「奴の命令って、…一体何事だ？」

「仔細を話す前にまず城内へお入れいただけますか。事はかなり逼迫しておりますれば、事情を話しつつ、対応したいことが多いございます」

相変わらず一部の隙も感じられないアルバインの雰囲気にも半ば殺がれ、アモンは言われるまま、城門を開けた。

「恐れ入ります。それと、城門の錠はしっかりとおかけください。

気休め程度とは思いますが、無いよりはましかと存じます」

言われた意味を半分も理解できぬまま、アモンは城門を硬く閉ざすと、城へと引き上げる。背後にはアルバインが付き従った。

玄関に入ると、室内の灯りがアルバインを照らし出す。

その姿に一瞬、アモンはぎょっとした。

服装こそ以前に訪れた時と変わらないものだったが、その腰には左右に短刀が帯びられ、右手の義手は以前に見たものと比べて明らかに武骨なものが取り付けられていた。

「どうかなさいましたか？」

「いや、まるで戦にでも向かうような格好だと思ってな…」

「まさしく」

「？」

「おっしゃる通りです。私は戦支度をしてこちらに伺いました」

相変わらず、アルバインの話はどこどころが意味不明だった。

「とりあえずはお話を済ませるのが先決ですね。どちらかお部屋をご用意いただけるとありがたいのですが…」

「ああ、では応接室に」

以前の賊の襲来時に踏み荒らされた一階の応接室は、今は綺麗に片付けられている。ただ数箇所、傷が増えたテーブルだけが当時の修羅場を想起させた。

「ここならゆっくり話も出来るだろう。さて、色々聞きたいことが山ほどある。テオドール、林檎酒と茶を用意してくれ」

玄関先で合流したテオドールにアモンが命じる。

「いえ、私はけっこうです。というより殿下、テオドールさんとアルセイデスさんは出来れば今すぐにでも城からお出になったほうがいいかと」

「？」

「でなければ、どこかこの城に身を隠すような場所があればそこに…」

「ちょ、ちよつと待て、話が見えん！」

一向に見えてこない話の内容に痺れを切らし、ついにアモンが核心の質問をした。

「一体、この前の手紙はなんだ。私の身边がどうしたというんだ！あまりに話の全体が見えず、狼狽さえしだしたアモンを見つめながら、アルバインは表情ひとつ変えずに率直に答える。

「殿下の暗殺計画が現在進行中です。もう数刻でこちらに暗殺部隊が到着します」

アモンとテオドールは、その場でまさに驚愕の体となった。

説明と準備

アルバインの説明はこうだった。

つい先日の賊の襲来、そしてアモンにとってはあまり思い出したくないガトツクの凶行、それらは国を越え、フューレイの耳にも入っていたらしい。

そこで、フューレイは自分の外交特務官という地位を利用し、方々に探りを入れ、アモンに対する暗殺計画とそれの計画者を洗い出したという。

「ベルディニオ中央議会執政院第一執政官、イジドル・リラダン。それに同じく元老院第一執政官エイモス・アルギエリ。二人とも親王派の中でも特に殿下の存在を危険視している人物です。先日の賊の襲来も、獣狼人を利用した暗殺未遂も、彼らの手引きによるものでした。そして、今日…正確には数刻後に、彼らの手配した大規模な暗殺部隊がこちらに到着すると、密偵を通じて知ることとなり、こうしてまかりこした次第です」

色々な意味でアモンは呆気に取られた。まさかフューレイがそこまでベルディニオの内情に精通していたとは。しかも、わざわざ一度しか顔を合わせたことのない自分のためにそこまでの労力を割いてくれていたとは…。

「ありがたくて涙が出そうな話だが…、いかんせん、そこまで私にしてくれる理由が分からんな」

素直な感想である。

実際、フューレイとはそれなりに分かり合った仲だとは感じている。

とはいえ、さすがにここまでされる義理は無いはずであった。

「何がしかの胸算用でもあるのか？」

「…これは主のおっしゃっていたことなのですが、簡単に申し上げますと、今はアモン殿下に生きていていただかなければ困ると…。それだけです」

「この私にまだ駒としての利用価値があるとも言おうような話だな」
「受け取られようによつては不快に思われるかもしれませんが、主は決して殿下を軽んじてはおりません。むしろ心から信頼されているからこそ、殿下の身をご案じになり、私を差し向けたのです」
「…ふむ」

得心こそいかなかったが、この件について長く時間を割くのはあまり利口とも思えなかった。何せアルバインの話が本当なら…いや、恐らくは本当だろうが、数刻後に迫った敵の来襲に対し、すぐにでも備える必要がある。

「で、その暗殺部隊とやらはどういった連中なんだ？」

「親王派の若い軍人たちで構成された部隊です。専門の装備と高い士気は脅威ですが、いかんせん若く経験の浅い者がほとんどなのが弱点といえるでしょう」

「若い連中は簡単に口の上手い奴に踊らされるからな…」

言いながら、ふと頭をガトックの一件がよぎり、アモンは眉間にしわを寄せた。

「となると、後は相手の規模か…。アルバイン、連中の数はどのくらいだ？」

「正確な数は申し上げられませんが、おおよそ百人前後といったところだと思われます」

「百…」

数を聞いてアモンは絶句した。

「それで…その数相手にこっちは一体どういう備えを予定してるんだ？」

「危険は承知ですが、殿下にはこの城の中で囷となってもらい、そこへ攻め込んでくる敵勢を私が相手いたします」

「…お前が？」

「はい」

「ひとりで？」

「はい」

どう考えても正気と思えない作戦に、アモンは再び絶句した。

百対一…。もし、自分を計算に入れたとしても五十対一。どちらにせよ狂気じみている。

「私もあまり人のことは言えたものではないが、レムレスというのは何か、慢性的な人手不足か？」

「加勢が私ひとりではご不満ですか？」

「不満だとかそういう次元の問題じゃない。お前一人が私たちに加勢しても、単に死体が四つに増えるだけだと言っているんだ」

正論である。

だがアルバインはなお、冷静な表情を崩さない。

「どうやら殿下は私を過小評価なされているようですが、それは致し方ありませんね。こればかりは実践して証明するほかは無いですよ。うから、今はただ信じていただくしかありません」

アモンはしばし考えたが、答えは案外と早く導き出された。

現実に関、自分とアルバイン以外に戦力と呼べるものが無い以上、はなから選択肢など他には存在しないのだ。

「分かった。信用するしないの話はひとまず置いておくとして、具体的な作戦を聞こう」

「承知しました。ではまず、テオドールさんとアルセイデスさんの隠れる場所を確保しましょう」

「テオドール、この城のことは先に住んでたお前のほうが詳しいだろう。どこか隠れるのに良さげな場所は知らないか？」

先刻から二人の横で話を聞き続けていたテオドールは、不安そうな顔をしながらもアモンの問いにうなずいて見せた。

作戦と実行

テオドールは、アモンがこの城へ来るよりもずっと以前からここに住み着いていた。

ゆえに、彼女の持つ城の細部に関する様々な知識は、今回の作戦を非常に円滑に進める役目を見事に果たした。

まずテオドールとアルセイデスは、台所にある地下の食料貯蔵庫に身を隠した。

これの入り口は一見、簡単に発見される類のものであったが、重要なのはその内部の構造だった。

地下の食料庫は急な階段を下りながら到達する仕組みになっていたが、実はその階段の途中にもうひとつ、小さな貯蔵庫への扉が存在する。

構造を知らない人間は地下へと下る階段に気を取られ、本来の食料庫に意識が集中してしまうため、この扉は完全な盲点となるのである。しかも、長年の使用によって煤けたその扉は石壁とほとんど同化しており、存在を知ってすら、扉を見つけるのは容易ではない。

二人は事が済むまで、この狭い貯蔵庫に隠れることになった。

アモン自身による囂作戦も、テオドールの知識が威力を発揮した。二階のもっとも奥に位置する部屋は、入った際には二つの窓を備えた普通の部屋が一つあるのみであるが、実はその部屋右手奥にあるドアを開けると、窓一つ無い小さな正方形の部屋がもうひとつある。

アモンはそこに潜むことになった。
そして手前の部屋にアルバインが陣取る。

「相手は迷い無く、ただ殿下のみを狙って城を探索するでしょう。そこが付け目です。最悪、城に火を放たれる危険性もありますが、その点は古城特有のこの城の特性が火の回りを最小限に抑えてくれます」

近代になって建てられた城は居住性を重視して作られた反面、石造りの部分が少ない他、無用に装飾用のカーテンや絨毯などの可燃製品が多く存在する。

しかし、中世期に作られたこの城はほぼ全ての建材が石のみで造られており、可燃製品も極端に少ない。火を放たれる事態となっても、城を火が覆うことはまず無いと言ってよい。

持ち合わせた条件の中で最上の準備を整えた今、あとは数が脅威の暗殺部隊到着を待つのみとなった。

「では殿下、私がドアを開けてくれるようお願いするまで、決してこの部屋から出ないでいてください。それと…」

急にアルバインがアモンの胸元を撫でた。

「もしも敵の侵入を許してしまった時は、躊躇無くそれをお使いください」

「…ああ、出来ればその機会が無いことを祈るがね」

「私もそうならぬよう努めます」

言って、アルバインはアモンを残してドアを抜ける。

「アルバイン！」

まさにドアを閉めかけていたアルバインに声をかけた。

「…死ぬなよ。こんなバカげたことで命を落とすほど、くだらない

ことは無いからな」

と、閉めかけたドアの隙間からアルバインが微笑む。
始めて見せる表情にアモンは少なからず戸惑った。

「その台詞は私が申し上げるべき言葉ですよ殿下」

言い終えるのを待たず、アルバインは自らドアを閉める。

アモンは上着をはだけると、懐のものにしっかりと手を添えた。
時は今、まさに満ちようとしている。

吐き気と危険物

昨今、すでに各国の軍における兵員の主力兵器は銃火器である。

つい先ごろに、ベルディニオと同じく大陸三大列強に数えられるガレイオで開発されたそれは、「見えない槍」という異称で瞬く間に大陸全土に広がった。

金属製の筒に火薬と、同じく金属製の弾丸を詰め、それに点火した際の爆発力を利用して弾丸を高速で発射するというこの兵器は、以前から城攻めなどに用いられてきた大砲の原理をそのままに、小型化に成功したものである。

とはいえ、難点が多い。

まず火薬を用いるため、雨天などでの使用が困難であること。さらに有効な射程が約百五十ヤードと、弓矢と比べて大差が無いこと。

しかも弾丸の発射に際しては銃の後部側面にある点火口に火をつけなければならないこと。

そして一番の問題点。

一回の発射ごとに火薬と弾丸の装填を再度行わなければならないということが、実際の戦場においては極めて大きな難点であった。

ゆえに兵員の装備している銃はその全長、平均約四フィートのうち、先端の約一フィートが小剣となっており、射撃後に再装填の間もなく敵に近接された場合にはそのまま白兵戦が出来るように工夫がなされている。

そうした武器を装備した敵が約百人…。

限りなくカラに近いこの城へ、まさに城攻めに向かってきている。

「この状況に吐き気をもよおすのは正常な反応だよな…」

アモンは狭い部屋の天井を見つめながらつぶやいた。

いつそのこと、さつさと来てくれという矛盾した考えが浮かぶほど、こうした緊張状態での長時間待機は精神を病む。

少し前辺りから、アモンは突然叫び声を上げたいという衝動を抑えるのに苦労していた。

「そうだ…」

ふと思い立ち、ポケットを探る。

愛用の煙草入れとマッチ箱を取り出すと、いそいそと煙草をくわえ、マッチを石壁にこすりつけ点火し、煙草に火を灯す。

今になってようやくルイス産の極上品の味かしみる。

といっても、忘れ草とは名ばかりで、さすがに今の現実を忘れ去るには到底及ばない。

しかし、先刻から悩まされていた吐き気が緩和されたのはありがたかった。

床へ無造作に灰を落としてつつ、胸に煙を満たす。

一体この作業をあとのくらい続けることになるのやら…。

同じような考えを幾度も繰り返した。

苛立ち、アモンはやにわに懷のものを取り出す。

「…頼むからこんなもの使うことにだけはなるなよ」

取り出したアルバインからの贈り物を見つめつつ、強く願った。

今日の朝から自分を不安感で責めさいなみ続けた原因、携帯式自動点火銃。

兵士たちの用いるものと違い、全長は一フィートにも満たないこの銃は、主に将校が携帯しているもので、基本的には実戦に用いられるような代物ではない。あくまで勲章、階級章などと同じく、権威を示すのが主な用途である。

だが、腐っても銃器である。しかも将校の携帯を前提に作られている。

ゆえにその作りは極めて精巧で、持ち手の先に取り付けられた引き金を引くと、内部の激鉄が火薬へ即座に点火し、弾丸の発射をわずかに一動作で行うことが出来る。単純に言えば、内部にからくり仕掛けの火打石を仕込んでいると思えばよい。

その構造の緻密さから、量産が出来ないために現在はもっぱら将校専用のおもちゃだ。

一部では新しものの好きの王侯貴族も手にしているとは聞いていたが、まさか自分にそれが送りつけられることになるとは、これっばかりも予想していなかった。

「全く…、この前のマンドレイクといい、どうしてこう私の周りには危なっかしいものが次々と集まってくるんだ…」
アモンは床に視線を落とし、頭を抱えた。

次の瞬間に、まさか自分がその姿勢のまま、しばしの時を過ごすことになるかも知らず。

強襲と絶叫

突然、隣の部屋から重くのしかかるような轟音が響いてきたのは、まさにアモンが頭を抱えたその時だった。

まるで耳を裂くような、それでいて腹に響くような音が継ぎ目も無く隣の部屋から聞こえてくる。

あまりの音の大きさに耳がバカになり始めたが、おかげで逆に細かな音の構成が理解できた。

まずガラスの碎ける音。

続いて石壁を金槌が叩くような音。

そして、止む事無く続く何かの炸裂音。

それはまだ中央にいた頃、式典で打ち鳴らされた大砲の音を想起させたが、ひとつひとつの音はそれとは比べ物にならないほど小さいとはいっても、連続して響き続けるその音は十分にけたたましかった。

が、程無く音は途切れ、再び静寂が戻った。

気づくと自分がくわえている煙草の匂いにわずかながら硝煙の匂いが混ざりだしている。

「アルバイン、何事だ！」

大声を張り上げたはずの自分の声が、やたらと小さく聞こえる。代わりに、静寂が戻ったはずの耳に、ひどく低い笛のような音が響き続けている。

「敵の銃撃です。恐らくはこれから弾丸を再装填した後、直接城の中に乗り込んでくるものと思われます！」

高く、通りの良いアルバインの声すらも、今のアモンの耳ではかろうじて聞き取るのがやっとであった。

「ああそうかい。となるとやはり最初に言ってた通り、お前一人で百人からの敵を相手にするわけか。そりゃけっこうだ！」

「大人数では一度にこの部屋へ押し入るのは不可能です。となれば、全体の数はそれほど重要ではありません！」

「理屈がどうあれ、百人の敵は十分問題だろうが！」

「申し訳ありませんが、もういつ戦闘に入るか分かりません。お話は後ほどにお願いいたします！」

自分で聞き取ることの出来ない舌打ちを鳴らし、アモンは部屋のドアから離れると、苛立ちながら銃を構え、時を待った。

正直、涙が出そうなほど我が身が情けなかった。

いくら当人の申し出とはいえ、女一人に百人もの敵を任せ、自分は縮こまってこんな狭い部屋の中に身を潜めている。

とてもではないが、己の身分を思うと耐えきれない屈辱だった。

本来、高位に身を置くものは率先して前線に立ち、他の者たちに範を示すのが慣わしである。

自分の父…先代当主だったオーギュストもまた、そうして死んでいった。

無論、自分にはそんな気概も誇りも無い。それは分かっていた。分かっていたが、いざ他人を盾に生き延びようとしている我が身を思うと、あまりにもいたたまれなかった。

（いつそこの部屋から出て、アルバインとともに敵と切り結ぶべきではないか…）

そんな考えすら浮かび始めた時、石壁を通して廊下から響く多くの足音が隣室に迫るのが聞こえてきた。

「アルバイン、返事是要らん。もう一度言うからしっかり聞け！」
アモンはドアに向かい、大音声で叫んだ。
「絶対に死ぬな！」

まもなく、隣室のドアが蹴破られる音が聞こえた。

理性と限界

ドアの蹴破られる音が聞こえた後の隣室から響いてくる音はまさに悪夢のようだった。

次々に室内へと侵入してくる足音、何人もの怒号のような叫び声、散発的に鳴り響く銃声。

それが露の間を挟んで急に音の種類が増えた。

金属同士の摩擦音、いくつもの短い悲鳴のような声、それと合わせるように響く床を叩くような音。

いつまで続くのか分からず部屋を満たし続ける不快な戦闘の音は、少しずつアモンから理性を削り取っていく。

実際、気をしっかり持っていなければ、アモンは自分がどうにかなりそうだった。

暴力的な音の洪水に加え、部屋の中に金臭い血と硝煙の匂いが濃く立ち込めてきた時、不覚にもアモンは一瞬、気を失いかけた。

くわえていた煙草が口からこぼれる。

震える唇とあごは、もはやそれを繋ぎ止めておけなかった。

続くように次は膝が震え始め、さらに指、肩、そして全身に及んでいった。

もはや正気だけでなく、体を支えることにすら気力を振り絞らねばならなくなり、アモンは自身の限界がすぐそこまで迫っているのを嫌でも思い知らされ、己の非力さにただただ失望するほか無い。

（頼む…頼むからこらえろ。お前は腐っても、この城の主なんだぞ！）
自分自身を叱咤する心の声を必死に繰り返しながら、同時にどうか一刻も早くこの状況が終わってくれることを祈り続ける。

しかし、アモンはこうした手前勝手な願いは総じて叶わないことも分かっていた。

それでも、祈ることを止められなかったのは、単に何か漠然とした何かにでもすがっていなければ、もう自分を保ち続けることが出来なかったからに他ならない。

その証拠に、ドアの下から床を這うように部屋へ大量の血が染み入ってきた時、アモンはついに限界に達した。

込み上げる強い吐き気すら忘れるほどの本能的な衝動に支配され、部屋に入る前にアルバインからなされた指示も完全に無視し、アモンは内側からかけたドアの鍵を開けると、右手に銃を構えながら部屋を飛び出し、隣室に躍り出た。

全身の震えはすでに止まっている。

狂気と屍

部屋を飛び出し、隣室へと踏み込んだアモンは、その時目にした光景を以後、生涯忘れられなかった。

それはあまりにも異常、異様、異質…言葉で形容できる範囲を完全に逸脱していた。

部屋は床一面を血染めの死体が覆い、足の踏み場すらない。というより、もはや幾重にも折り重なった死体そのものが床となっている。中でもひとときわ高く死体が重なり、塚のように膨らんだ部屋の中心に、アルバインは立っていた。

全身は返り血でくまなく染まり、両手に握られた短刀はどちらも無数の刃こぼれによって、まるでノコギリのような形状に変質している。

静まり返った部屋の様子に、はたと我に返ったアモンは、とつくに無数の音が止んでいることによりやく気づき、

「おい、アルバイン。…無事か？」

詰まった声を押し出すように呼びかける。

と、アモンの声に反応し、ゆっくりと振り返ったアルバインは、震えの止まった彼の体を再び震撼させた。

大きく見開かれた目は明らかに狂気を帯び、口元までも濡らす返り血は、まるで敵の生血を啜ったようにすら見える。

「…殿下、…私は部屋をお出になるよう声をかけましたか…？」

屍の塚を踏みしめながら、アルバインが問う。

「…いや、何も言われてはいない。私の勝手で出てきた」

「困りますね…。いくら殿下といえども、有事にはしっかりと指示を守っていただかないと…」

再び震えだした足を血でぬめった床に取られそうになりながら、アモンは構えた銃を下ろしつつ、慎重に答える。

「ああ、…すまなかった。以後は気をつけるよ」

部屋の中心から不安定な死体の足場を踏み越え、自分に近づいてくるアルバインの目が少しずつ、いつもの穏やかなそれへと戻ってくるのを見て、アモンはほっと吐息を漏らした。

「で、どうなんだ。どこか怪我は無いのか？」

「ご心配痛み入ります。いくつかかすり傷はあると思いますが、治療が必要というほどの大きな負傷はありません」

「そうか…。ならとりあえず風呂にでも入れ。着替えも用意させよう」

「ご遠慮を…と申し上げたいところですが、確かにこれでは身動きが取れませんね」

「しばらくここで待っててくれ。テオドールとアルセイデスには私が声をかけてくる」

言って、死体の床を踏み越えて廊下へと向かう。

そしてアモンはその想像以上の不安定さに愕然とした。

（こんな足場で、…あいつはこの連中、全部相手にしたのか…）

信じがたい事実を目の当たりにしながら、ようやく廊下へ出たアモンは急ぎ、テオドールたちの待つ一階へ向け、廊下を駆け抜けた。

夜明けと辞去

「ご高配の数々、まことにかたじけのうございます」

相変わらぬの堅苦しい口調で、アルバインが丁寧な頭を下げる。

地下に潜んでいたテオドルとアルセイデスに声をかけ、事態が終わったことを教えた時、二人の従者はまるで雪に水をかけたように、狭い室内で崩れ落ちた。彼らの双子のような安堵の表情に、アモン自身も安心させられたのは、彼のみの秘密である。

さて、それからの城内もそれなりに慌ただしかった。

まずアモンの指示でテオドルは湯殿の支度のため、そのまま台所で鍋を沸かし始め、アルセイデスはアモンが普段一切袖を通さない外出着の中からアルバインに着せる服と、同じく、サイズが合うであろうと思われる自分の靴の中から適当なものを見繕う。

そんな中、アモンは血の滴るアルバインに、出来るだけ廊下を汚させないよう、雑巾でブーツを拭わせると、準備の整った湯殿へと誘導していた。

アルバインが湯に浸かっている間、テオドルは絞れば滝のように血が流れ出しそうなアルバインの服をバケツに入れて外に放り出し、身震いしながら残った血みどろのブーツを洗った。

そして、

アルセイデスの準備した服と靴に着替え、湯から上がったアルバインは今、荒らされ方の軽かった一階応接室でアモンとテーブルを挟んでいる。

「ほんとに大した怪我は無いようだな」

返り血に染まっていた時には全く確認できなかったが、湯を浴びてさっぱりとしたアルバインの体には、見たところ確かに目に付くような傷は存在しない。

ちなみに、一瞬とはいえアルバインの湯上り姿を観察しつつ、うっすらと濡れた髪と透き通るような白い肌、凛々しくも美しい顔立ち、不釣り合いに大きな服に包まれたその姿に、妙な劣情を感じてしまったのは、これまたアモンだけの秘密である。

「おかげさまでこのように無事でございます」

「おかげさまで…、私は何もしとらんぞ」

「いえ、殿下が敵襲の際、廊下まで響く声で叫ばれたおかげで、囃作戦は成功したといっても過言ではございません」

「…あー、あれか…」

自分の意図したものととは違う形で、自分の行動が結果として役に立ったという事実は、どうも素直に喜べなかったが、なんにせよ締めが整ったなら上等といえるだろう。

「しかしまあ、事が済んだ今でも信じられんが、よくもまああの数相手に戦えたなあ」

「繰言になつて申し訳ありませんが、前にも説明いたしましたとおり、あの狭い部屋へは一度に侵入できる敵の数は知れています。それに、現実にはひとつの目標へ多勢でかかるのは同士討ちの危険が大きく、なかなか上手くは攻めてこれないものなのです」

「まあ、白兵戦はそうかも知れんが、敵は銃を…」

「これも狭い部屋だからこそその利点です。あのように手狭な空間では相手の銃の射線は容易に見て取れます。つまりは長槍で室内戦をする愚行とさほど変わらないのです。それに…」

「それに？」

「乱戦では、敵の放った弾は他の敵に弾除けになつてもらふことも出来ます。これも多勢でかかった敵の軽率が招いたこちらの幸運でしょう」

「なるほど…」

理論、実践ともに恐ろしく戦懼れたアルバインにただ感心しつつ、アモンはレムレスという国…と、それに加え、フューレイの底知れない何かにぞっとする感覚を覚えた。

「それにしても、あいつら全員覆面もつけず、顔を出したまま攻めてきたな…。正直、あれが一番こたえたかも知れん…」

「？」

「気分が悪いつてことさ」

「…申し訳ありませんが、もう少し詳しくご説明願えませんか。殿下のお言葉の意味がどうも理解できません」

不思議そうな顔をしたアルバインに言われ、アモンはさも気乗りしないといった顔で答える。

「…顔の見える死体…、いや、顔を見た奴が死ぬのはどうにも苦手なんだよ」

「？」

「顔を見れば、どうしてもそいつの人生を考えてしまうから…」

アモンの答えはかなり漠然としていたが、それでもアルバインはそこにある真意をどうやら汲み取ったらしく、納得したようにうなずきながらアモンを見つめた。

「フューレイ様が殿下をお慕いしている理由が、分かった気がいたします」

「…どういう意味だそりゃ？」

「言葉通りの意味です」

「うーん…」

今度はアモンが当惑した顔を浮かべる。

すると、アルバインは突然席を立った。

「さて、ひとまず主の命は果たせたと思われますので、申し訳あり

ませんが私はこれにて失礼をさせていただきます」

「失礼って…、お前、今何時だと思ってるんだ？」

ガラスの割れた窓からは、すでに暁を知らせるように東の空から白いもやのような光が見え始めている。

「急に來て急に去るっていつでも、もうちょっと加減てものがあるんじゃないのか。それにあんな戦いの後だ。今日はここで休んでいても構わんだろう？」

「お氣遣いはまことにありがたいのですが、今回はご遠慮させていただきます。それと、死体の後始末のほうはお任せいたします。私は別の後始末を済まさなければいけませんので」

「おいおい、あんな死体の山どうやってこっちで処理しろって…、いや、待て。なんだ、その別の後始末って…」

「アモン殿下の暗殺計画を立案し、遂行しようとしていた人間がベルディニオの中央にいることはもうお話した通りです。ですから今度はそちらの始末をつけて参ります」

アモンは明らかに嫌な予感がした。

「ちょっと待て、始末って一体…」

「主のお言葉を拝借すれば、（仕事は丁寧に）ということです。私も手抜かりは嫌いなのでご心配無く」

「いや、だからそれが心配なんだ…って、おい！」

椅子から立ち上がり、部屋から出ようとするアルバインに空しい呼びかけをするアモンに一言、きつぱりとした辞去の言葉が返された。「テオドールさんとアルセイデスさんにはよろしくお伝えください。それでは」

慌ただしい夜が慌ただしい客人とともに去る。

自分の服を着たアルバインの後姿を見送りながら、アモンは極度の緊張から開放されてなお、眠りにつく気が一向に起きない。

やがて玄關を抜け、城門を出るアルバインをガラスの無い窓から確認すると、再び力無く椅子に腰を落とした。

窓から肌寒い朝の風が吹き込んでくる。

清掃とエント

今回の騒動における、ある意味での最大の被害者はテオドールだった。

荒らしに荒らされた城中の部屋を掃除して回り、時に血の染みた床を見つけては、半分悲鳴を上げながら洗った。

もちろん、アモンもそれなりのことはした。

割れた各部屋のガラスを職人に注文し、届けられたガラス板をはめ込んで廻る。

修繕までを全て職人に任せることも出来たが、そこは城の惨状から色々と鑑み、最終的には体面を重視して自らの手で修理を行うことに決めた。

昼の小休止を取り、皮手袋を外して林檎酒をすすりながら、アモンは考えなければならないことの多さに頭を痛めていた。

「あの部屋は一体どうしたものかなあ……」

アルバインの手によって百体もの死体が転がる二階隅の部屋。

すでに数日を経過していたが、いまだあの部屋には誰も近づいていない。

というより、あれ以来二階にすら誰も上っていなかった。

アモンはすでに自分の寝室に戻れない日々慣れ始めている。

とはいえ、このまま放置するわけにもいかなかった。

いくら涼しくなってきたとはいえ、そうそう長いこと大量の死体を城の中に留めておくのはどう考えても無理がある。

腐敗が進行すれば城の衛生環境は壊滅するのは明白だからである。

「…はー、全く。何からどうやって手をつけていいやら…」

青息吐息のアモンがつぶやいたその時、急に今さっきはめたばかりの窓ガラスの先に、奇妙なものが見えた。

それはぱつと見には単なる樹だった。

庭に植えられた多くの樹のうちのひとつと見ても問題は無いほどに、見た目は極めて平凡な樹。

だが明らかにおかしい。

最初こそ風にざわめいているように見えたその姿は、よく見ると確かに動いている。

その証拠に、今現在その樹はちょうど城門を出、森へと向かって進んでいた。

一瞬呆気にとられたアモンだったが、すぐさま手に持った杯をテーブルに置くと、急ぎ足で玄関へと向かう。

しかし、急ぎ足は途中で止めた。

動く樹に追いつくにはそれほど手間は取らなかったからである。

樹の動きは非常にゆっくりとしており、その移動速度はおおよそ散歩中の自分と変わらないほどだった。

そして追いついて気づいた点が二つある。

ひとつは、樹が手のように伸ばした枝に二階で腐りかけているはずの死体を絡めるようにぶら下げていたこと。

もうひとつは、その樹の上にまるで当たり前のようにアルセイデスが腰掛けていたことである。

静かに、のそりのそりと森へと向かう樹を見ながら、アモンは樹の上に陣取るアルセイデスへ声をかけた。

「…あー、アルセイデス。取り込み中にすまんが、…これはなんだ？」

「あ、殿下。上から失礼いたします。今ちようど二階の死体を森へ片付けにいく途中でして…」

「いや、そうじゃなくてだな…。その…、この樹はなんなんだ？」

「エントです」

まるで当たり前のことのように答える。

「エントは大陸全土に見られる特殊な常緑高木で、その特徴は…」

「…いや、説明はいい。忙しいところすまなかったな」

過去にあった数々の疑問が解けた代わりに、アモンはさらにアルセイデスのことが理解できなくなったことに困惑しつつ、城へと引き上げてゆく。

翌日、全ての死体が除かれた二階の部屋は、簡単な清掃の後、開かずの間として封印されることになった。

親切と悶絶

「あ、殿下。これから久しぶりに森ですか？」

玄関から顔を出したアモンにアルセイデスが声をかける。

すでにあの悪夢のような惨状があらかた片付き、城に落ち着きが戻った今日、アモンは数日振りの森の散策へ向かおうとしていた。

「ああ、もう血なまぐさい城の中には飽き飽きしていたからな。久々に羽を伸ばしてくるよ」

事件の際にも、特に目標とならなかったおかげでほとんど無傷で済んだ庭を眺めながら、アモンはついこの間の出来事をまるで遠い昔のここのように感じていた。

「全く、庭が無事だったのは不幸中の幸いだったな」

「ほんとに」

以前と変わらぬ穏やかな会話を庭園に響かせる主人と庭師。

真昼の日が肌寒さを隠し、ほのかな暖かささえ与えてくれる。

と、談笑する二人に玄関からテオドールが呼びかけてきた。

「バカ公爵、今朝届いてた書簡、渡すの忘れてました。散歩に行くなら目を通してからにしてください！」

「過失が自分にあるのにその言い草はなんだ！」

一瞬にして憤怒の形相に変わったアモンはまるで地面を蹴飛ばすように玄関先まで戻ると、テオドールからひったくるように書簡を取り上げ、手荒に封を開けて内容を改める。

「えーと、何々…また中央の話か…」

ベルデイニオ中央議会執政院第一執政官、イジドル・リラダンと、元老院第一執政官エイモス・アルギエリが昨日、自宅にて何者かに殺害さる。

犯行の手口は極めて巧妙にて、犯人特定に結びつくものはいまだ皆無。

一部情報筋によれば、反王勢力派による暗殺説が浮上している…。

「…どうかしました？」

明らかに疑惑が自分に向かう形になっている書簡の内容に、アモンは完全に声を失った。

憤怒の形相から一転し、蒼白となった顔の主人にテオドルが声をかけると、まるでそれを合図とばかりにアモンは玄関から廊下を抜けて食卓の間へと一気に走りこみ、今読み終えたばかりの書簡を力いっぱい暖炉へ投げ込んだ。

すぐさま、主人の異常を心配したテオドルが追いつき、再び問う。

「なんなんです、どうしたっていうんですか一体！」

「知るか！」

乱暴に従者の質問を撥ね付けると、アモンは頭をかきむしりながら悶絶した。

「何が仕事は丁寧だ、これじゃどう考えても私が疑われるだろうが！」

アモンは人の親切がこれほど迷惑に感じる場合があることを生まれて始めて知った。

そして、フューレイを一度でも（いい奴）だと思った自分を絞め殺したくなった。

暖炉の中で書簡が灰へと変わる。

その日は終日、城中にアモンのうめき声が鳴り響いた。

寒気と険悪

「寒い！」

アモンがこの言葉を口にするのは今日何度目なのか、もはやテオドールもアルセイデスも、ましてアモン当人もすでに分からなくなっていた。

時期外れ……とまでは言わないまでも、かなり早い時期に突然この辺りを訪れた強烈な寒波がアモンの城を包んだ時、折り悪しく城の燃料は底を尽きかけていた。

「テオドール、これから本格的に寒くなるうつつという時期にコークスを切らすとは何事だ！」

「仕方ないでしょう、ここのところやたら忙しくって注文を忘れちゃったんですから。大体、私のする仕事自体どう考えても多すぎるんですよ！」

主人の文句に反論しつつも、当たる暖炉は一緒である。

コークスとは、石炭を乾留して作られる多孔質の固体で、強い火力を発生する。

主に鍛冶屋の製鉄、調理場の煮炊き、冬場の暖房に暖炉などの燃料として用いられる。

それが現在、城にはほとんど備蓄が無い。

結果、主人と従者、そして庭師の三人が、仲良く集まってひとつの部屋の暖炉の前に丸まっていた。

「アルセイデス、ほら、なんだった、……あー、エントとかいう妙な樹。あれに薪を集めさせるとかは出来ないのか？」

「無理ですよ。少し考えれば分かるでしょうけど、彼ら自身も樹なんですよ。樹に樹を燃やすから持ってこいなんて言えるわけないじゃないですか」

「…くそっ、役に立ちそうで変なところ融通が利かないな…」

毛布にくるまりながら、アモンはうらめしそうな文句を漏らす。

「あー、これでランタンの油まで切れたら、心が折れるな…」

「油は切らしてませんからご心配なく。…全くこのバカ公爵はいちいち細かいことをねちねちと…」

「何か言ったか！」

「空耳です！」

必要以上に喧嘩腰の二人を見ながらアルセイデスは、

（どうしてこの二人はこういった気力を有効なことに利用できないんだろう…）

暖炉からのぬくもりを感じつつ、そんなことを思いながらひとつ小さなため息をついた。

名案と明暗

険悪な雰囲気の中、三人揃ってひとつの暖炉に当たりつつ、ふとアモンはちよつとした不安に駆られ、先ほどから暖炉の前をてこでも動こうとしないテオドルに問うた。

「…ところで、今日の夕餉は一体どうするんだ？」

「一食ぐらい抜いても死なないでしょ？」

明らかに寒さを理由にした職務放棄宣言である。

アモンは無駄に腹を立てて空腹が促進されるのを避けるため、努めて冷静に反論した。

「私はその一食で一日を生きてるんだぞ、それを抜かれたら間違いなく死ぬだろうが…」

「はいはい、言い方を改めます。一日二日食べなくても死んだりしません！」

血が滲まんばかりに唇を噛みしめる主人。

わざとらしくそんな主人にそっぽを向く従者。

いたたまれない空気にもはやため息しか出ない庭師。

彼らのあまりに非建設的な時間はそのまま日暮れまで続くかに思えた。

しかし、

「あ、そうか」

「？」

いきなり勝手に納得したようなことを言うテオドルに疑問の視線を投げかけると、テオドルはやけにいやらしい目つきで笑い、二

人に言った。

「バカ公爵の蔵書、あれ燃やしましょう」

アルセイデスは、ああ、なるほどといった顔。

アモンは…死刑宣告でも受けたような顔をした。

「…えーと、テオドール。お互い寒いのはよく分かるんだが、できればもう少し面白い冗談を願いたいな。今の冗談では逆に凍え死んでしまうぞ」

「本気です」

アモンの言葉に食い気味で返答する。

と、いそいそとテオドールは立ち上がり、部屋を出ようとドアへ向かった。

「ちよつ、ちよつと待てテオドール、どこに行く気だ！」

「まずは一階の書庫から片付けようと思いますので、ご了承ください」

「了承するかそんなもの！」

「アルセイデス、悪いけど手伝ってもらえる？」

「はい、分かりました」

庭師の同意にアモンは一瞬、気が遠くなった。

能動と受動

目的が明確になった者の行動は迅速である。

まずテオドールは二階への階段手前にある一階の書庫へと足を運ぶと、鼻歌交じりに棚の本を無造作に床へ積み上げていった。

「おい、だからちよつと待てと言ってるだろうが！」

廊下の途中でアルセイデスを追い抜き、書庫へ辿りついたアモンがわめく。

「待ったら何か変わるんだったら待ちますけど、別に何も変わらないでしょう？」

「せ、せめて取捨選択ぐらいさせる。いくらなんだって全部焼くなぞ無茶だ！」

「その取捨選択が出来なかったからこんな無駄に場所食う紙の束が増えたんでしょうが！」

テオドールの無慈悲な言葉に、アモンは半分涙目になった。

すると、ちょうどアモンに追い抜かれたアルセイデスが書庫へ入ってきた。

「テオドールさん、とりあえずどんな感じに使います？」

「うーん、まあ優先順位を考えて、まず一階の食卓の間に本を運びこみましょう。あそこの暖炉がしっかり燃えてれば、一階全体を暖めてくれるからね」

「了解しました」

俄然やる気になった二人の従者を前に、主人のはずのアモンは悲しいほど無力だった。

テオドールが床に本を投げるように棚から下ろす。

アモンは手荒な本への扱いに悲鳴を上げる。
アルセイデスはそれを数冊ずつまとめて抱え、食卓の間へと廊下を進む。

そうした作業が幾度か行われたところで、書庫にあるいくつもの棚のうち、三つがカラになった。

「テオドルさん、とりあえずはこんなものでいいんじゃないですか？」

疲れた腰を伸ばし、力が萎えてきた両手を前後に振りながら、アルセイデスが言う。

「そうね、ひとまずはこれだけあれば十分でしょう」

「ひとまずってなんだ、これだけ持ち出してまだ不服なのか！」

廊下で怒鳴るアモンを完全に無視し、テオドルとアルセイデスは連れ立って食卓の間へと向かう。

と、従者たちの後姿を半ベそで見送っていたアモンの目に、テオドルの右手に握られたマツチ箱がふと見えた。

まるで津波のごとく急激に、これから起きるであろうと想像していた惨事がまさに現実になるのだという感覚が押し寄せるのを感じ、アモンは目を回して倒れかけた。

「お、おい、二人とも、冗談、冗談なんだよな、なあ、これ何かの冗談……」

現実逃避の主人の言葉をあざ笑うように、まもなく食卓の間から煌々と炎の光が漏れ始める。

「あーーーーーっっ！」

絶叫しながら廊下を走り、食卓の間へと駆け込む。

そして目にする。

この世の地獄を。

愛する蔵書の数々が、無残に暖炉の中で燃え上がる光景。
うれしそうに暖をとる従者たち。

アモンはすでに泣いていた。

「さすがに古い本はよく燃えますねー」

暖炉へ向かい、次々と薪のようにアモンの蔵書をくべてゆくテオドルは、嬉々とした表情で機嫌よく話す。

「ほんとですねー」

その様子を見ながら、次々と書庫から持ち出してきた本を手渡してゆくアルセイデスは答える。

「悪魔だ……。お前ら、絶対に悪魔だ……」

従者二人の横暴を見つめながら、アモンはただ、ぶつぶつと呪詛のようにそんなことをつぶやき続けていた。

落涙と林檎酒

「やっぱり部屋が暖かいと心にも余裕が出てくるわねえ」

「ほんとですねえ」

アモンの貴重な蔵書のおかげですっかり暖まった食卓の間で、二人の従者は楽しげに話す。

対して、当のアモンは部屋の隅へ椅子を置き、すっかりふてくされて林檎酒をすすっていた。

「…レイモン・ヤコブスの薬草図解、ウオラギネ・デルフの植物と薬理、ホルヘ・シーベリイの高等薬草学事典…」
恨みがましく燃やされた蔵書の名を暗唱する。

「さて、これだけ暖まれば気力も出るわー。さっそく夕餉の支度を整えちゃいましょう」

そう言つて、テオドールは機嫌よく台所へと向かった。

「じゃあ私は庭の様子を確かめてきます。この寒さだと霜が降りるかもしれませんから気をつけませんとね」

そう言つて、アルセイデスは機嫌よく庭園へと向かった。

ひとり残されたアモンはさらに苛立ち、林檎酒を飲む勢いを増したが、不思議なほど酔いが回らない。

「…おかしいなあ、なんでいつもの林檎酒がこんなに塩辛いんだろう…」

女々しい涙を杯に落としながら、なお飲む速度は衰えない。
気づくと、膝を抱えて座っている自分に情けなさがいや増す。

と、その時、

「殿下ー、テオドールさん、ちょっと外に来てくださーい！」

玄関から廊下を響き、アルセイデスの呼び声が届く。

落ち込みつつも、普段では普通あり得ないアルセイデスの呼び出しに反応し、アモンは廊下へ出た。

「何事ですか？」

「私が知るか！」

ちょうど廊下で顔を合わせたテオドールに問われ、隠しめせず不機嫌に答える。

「早く来てくださーい！」

玄関先から廊下へ顔を出し、アルセイデスが手招きする。何故だか満面の笑みを浮かべて。

足跡と白銀

廊下をテオドールと連れ立って玄関まで来たアモンは、手に持ったままの林檎酒で満ちた杯を指で弾きながら、アルセイデスに問うた。「一体何の騒ぎだ。こっちは急がし…くは無いが、非常に気分が優れないというのに…」

アモンが言い終わるのも待たず、アルセイデスは玄関の戸を全開にした。

瞬間、アモンもテオドールも息を飲んだ。

雪である。

白く、淡く透き通った微小な氷の結晶。

気づけば外は一面が白く彩られ、まさしく雪化粧をほどこした城と森とがまるで溶け合うような光景が広がっている。

降りしきるはかない雪の粒は、時折吹く横風を受けて真っ白な花の吹雪を想起させた。

「部屋の暖かさで窓が曇ってたから、全然気づかなかったわ…」
しんと降り注ぐ雪に興奮したように、テオドールは庭園へ早足に歩みだす。

見れば、すでに足跡を残せるほどの雪が地面を覆っている。

「時期は少し早いですけど、こういうのもたまにはいいですね」
玄関先に立ちながら、傍らで外を見つめるアモンにアルセイデスが言う。

テオドールはさらに積もり始めた雪に、はしゃぎながら足跡をつけ続けている。

「雪見酒か……。なかなか風流だな、悪くない」

横に立つ庭師に言うでもなく、アモンは思いが口から漏れ出すようにそう言つと、雪の中で舞う従者を見ながら杯を空けた。

明日には見渡す限りの白銀の世界が広がるだろう。
それもまた悪くない。

白く汚れの無い世界が一時といえども現れる。

いつしか凍えていた体は、明日目にするであろう世界への期待でほのかにぬくもりを感じ始めていた。

過労と家出

当然のことではあるが、人の忍耐には限度がある。

そして今、ついに忍耐の限度を超えた女性がひとり、古い城の中で耳をつんざくような声を張り上げていた。

「いい加減にしろこのバカ公爵――！――」

そう言われた当の公爵……アモンは従者のあまりの剣幕と怒号に部屋の隅で縮こまっていた。

「あー、テオドル……。言いたいことは分かったからとりあえず落ち着こう、な？」

「やかましいっ！」

なだめるつもりという言葉に一喝が返ってくる。

「前々から一体何言ってると思ってるんですか、私の仕事量！」

「……うん、だからそれはだな……」

「どう考えたって私ひとりでこなせるわけ無いでしょうが――！――！――！――」

アモンに反論の余地は無かった。

確かに客観的に考えても、この城におけるテオドルの仕事は尋常な量ではない。

掃除、洗濯、料理と言えば簡単だが、実際は城の各部屋の埃を落とし、後に掃き掃除、さらに拭き掃除。洗濯については衣類など言うに及ばず、絨毯やカーテン、テーブルクロス、ベッドシーツ等々、数え上げればきりが無い。そして当然だがそれらを干し、乾いたものを糊付けし、薬缶式アイロンで仕上げ、ひとつずつ丁寧にたたみ、所定の場所へ納める。

そして料理。アモンは基本的に一日一食程度しか口にしないとはいえ、さすがに毎日の献立を考え、それに必要な食材を用意し、調理して並べるというのは十分な労力である。

これらに加え、テオドールは城へ定期的に顔を出す城下の商店の御用聞きに食料品に限らず、ありとあらゆる日用品を注文する。

洗濯に使う石鹼しかり、掃除や消毒など用途の広い火酒しかり、暖房や調理に用いるコークスしかり、夜に灯すランタンの油しかり、ローソクしかり、アモンの吸う煙草しかり、マッチしかり、その他もろもろ枚挙に暇が無い。

常識的に考えてもひとりで行える仕事量でないのは火を見るよりも明らかである。

「…決めました」

急に今までの怒声が静まり、落ち着いた…いや、顔ははまだ前よりましになったとはいえ、三白眼で刺すように睨み付ける視線ではあったが、声のみ普段の落ち着きを取り戻してテオドールは言う。

「現在の職場環境が改善されるまで、私は仕事を放棄させていただきます」

「…え？」

「待遇改善しないなら、自分で全部やれって言ったんですよバカ公爵！」

その言葉を最後に、テオドールは城を出、いずこかへ行ってしまった。

探索と空腹

「…アルセイデス、テオドールは見つかったか…？」

食卓の間で力無く椅子にもたれかかるアモンが、ちょうど城へと戻ったアルセイデスに蚊の鳴くような声で問いかける。

「駄目です。方々探し回りましたが、やっぱりどこにも見当たりませんでした」

答えを聞き、アモンはさらに力を失ったようで、ぎしぎしと音を立てながら椅子に全身を投げ出す。

「行き先があるとすれば森くらいしか考えられないんですけどねえ。まさか、テオドールさんは城下に行くとは思えないし…」

「それについては同意見だが、いくらなんでも手がかりが無さ過ぎやしないか？」

「まあ、決意があつて出て行つたわけですから、そう簡単に見つからないところに身を寄せている可能性は高いですけどね」

「ああ…、いい加減あいつが戻つてこないと、本当に餓死するかも知れん…」

テオドールが城から姿を消してからすでに一週間。

アモンはテオドールが日々こなしていた重労働を我が身で体験し、ひどく反省した。

掃除についてはそれほど神経質にならなければ問題は無かったものの、洗濯物の扱いは一苦労などというものではなかった。

一日着替えずにいたり、ベッドのシーツを交換しなかったりすると、それだけで堪らなく不快であったため、寝巻きとシーツの洗濯だけは欠かさなかったが、この季節に氷のような冷たさの井戸水で洗濯

をするのは半ば拷問のようだった。

おかげで今、アモンの手はあかぎれだらけで痛々しい。だが、テオドールはそれを毎日こなしていた。

いかな無精者のアモンといえども反省するには十分すぎる思いと体験である。

さらに、日用品の注文。

これ自体は必要なものを町から顔を出す御用聞きに発注するだけの単純な作業であったが、ここでアモンは一昨日大きくしくじっていた。

食料品店の御用聞きが不用意に言った一言が原因である。

「おや、今日はご主人様自らご注文ですか。残念だなあ、あの黒工ルフのでかいケツを見るのがこちらに顔出す唯一の楽しみだったのに……」

無論、町人らしい下品な冗談ととっても問題は無い。問題は無いが、アモンのほうには大きく問題があった。

勝手口脇に置かれていた樽を力いっぱい蹴りつけると、城下まで響き渡るほどの怒鳴り声で、

「二度と顔を見せるなーーーーっつっ!」

こう言ったものである。

以来、食料品店からの御用聞きは訪れず、城の食料はほぼ底をついてしまった。

「餓死はきついな……。この寒いのに、腹を空かせて死ぬなんぞ不愉快なんてものじゃないぞ……」

「弱気なこと言わないでくださいよ。とりあえずテオドールさんを

探しがてら、木の実やら野草やら採ってきますから」

「木の実はいいが、野草で腹を膨らますのはしんどいぞ」

「この上、贅沢言わないでください」

ちなみにアルセイデスはテオドールの探索で手一杯のため、家事の一切はアモンだけで行っている。

「役割分担を間違えた気がしてならん…」

「…は？」

「お前が家事担当。私がテオドール探索担当のほう良かったかと後悔してる」

「…お言葉ですけど、殿下はこの寒空の中、一日中森の中を歩き回る自信がありますか？」

「…意地の悪い言い方をするな。私だって辛いんだ…」

暖炉で爆ぜる炎の音に混ざり、アモンの腹の虫が悲しい鳴き声を響かせる。

庭師と従者

テオドールが姿を消してすでに八日。

今日もアルセイデスは森を探索していた。

いや、正確には探索はしていない。

まっすぐにテオドールが身を潜める洞穴へ向かう。

「テオドールさん、調子はいかがですか？」

洞穴に首を突っ込みながら、アルセイデスが声をかける。

「別に、何にも変わり無いわよ」

膝を抱えて座るテオドールが答える。

実際には、アルセイデスはテオドール探索に森へ向かった初日に彼女を発見していた。

が、頑なに城へ帰ることを拒否する彼女の意思を尊重し、森へ探索に出かける振りをして毎日彼女の様子を見にこの洞穴へ顔を出している。それはアルセイデスなりの気遣いであり、アモンには悪いと思いつつも、テオドール自身が城へ戻る気になるのを辛抱強く待とうと考えていた。

が、すでに八日間。

アルセイデスの思いとは裏腹に、テオドールが城へ戻る気になる様子はいつまで経っても見られない。

現実問題として、もはやこれ以上は彼女無しで城の生活が成り立たないのは明白であり、アルセイデスも少なからず焦り始めていた。

「テオドールさん、毎日のように聞いてうるさく感じられてるとは分かっていますけど、まだ城に戻る気にはなりませんか？」

「……」

洞穴の奥を見つめながら、アルセイデスの質問に無言の回答をする。つまりはまだ帰る気になれないということである。

「困ったなあ……」

冗談抜きに心からの言葉だった。

自体がここまでこじれてしまうと、第三者による喧嘩の仲裁というのは極めて難しい。

だからといって、当人同士ではなおさら無理である。

洞穴の奥を見たまま、顔も見せないテオドールに当惑のため息を大きくつく。

「ところで、テオドールさんは具体的に殿下の何に腹を立ててるんです。仕事の件についてはもう十分に殿下も反省してるくらいお分かりになってるでしょう？」

「……」

「殿下は他にどんなことをしたって……」

「……分からないのよ」

アルセイデスの言葉をさえぎるようにテオドールがつぶやく。

「もう分からないのよ、何がどうして許せないのか、原因は仕事のことだってことは分かっているけど、何でまだ許せないのかが自分でも分からないの……」

言い終え、テオドールは自分の膝に顔をうずめてしまった。

人が二人以上いれば喧嘩も時には起きる。

それは仕方が無い。

だが、難しいのはその後である。

特に身近な者同士の喧嘩に言えることだが、引き金となる大きな事柄が発端となつて喧嘩は始まるが、大体は喧嘩の真の原因はあいま

いである。

日々の中で蓄積した小さな不満が何かしらの大きな要因によって爆発し、喧嘩となる。

親しい者同士のいさかいはほとんどがそんなものだ。

だから、真の原因が日々の中で蓄積された些細な不満の数々であるがゆえに、逆に理由が分からなくなってしまう。

ほこりが集まっていれば見ることが出来ても、その一粒一粒を確認するのが容易でないのと同じ理屈である。

そして最後には、漠然とした怒りと長く置きすぎた時間によってますます相手との和解は困難になってゆく。

理屈だけで動いているならば人はなんとも楽な生き物だ

しかし、そこに自分でも自由にならない感情というものが関わるせいで、人と人との関係は常に危い綱渡りを余儀なくされる。

言うなれば、アモンもテオドルも加害者であり、被害者なのだ。

当人たちはそれを認めないだろうし、認められないだろうが、結局真実とはそんなものである。

「…気持ちは分かるなんて軽率なことを言うつもりはありません。でも、どうしても分からないのなら、もうしばらくこうしていてもいいと思います」

言って、アルセイデスは洞穴の出口へ向かう。

「また来ます。無理せず、ゆっくり休んでください。今は落ち着いて考える時間が必要なんだと思いますから」

アルセイデスが洞穴を去ってから、しばらくテオドルは顔を上げられなかった。

自分で自分の気持ちを理解できない不快感に再び漠然とした怒りが湧く。

しかし、怒りの矛先はどこにも無い。

それだけが今、自分の理解できる唯一のことだった。

三日月と本心

星明りと三日月が輝く夜、洞穴から空を見上げながらテオドールは考えていた。

一体自分は何をしているのだろうか？

元来、洞人は孤独な種族だ。

一定の年齢まで育つとすぐに親元を離れ、兄弟姉妹とも以後会うことは無い。

森や山などを転々としながら、住みやすそうな洞穴を見つけてはそこに身を落ち着ける。

だが、自分は仲間たちとは少々違っていた。

無論、洞穴での生活も十分に快適だった。しかし、ちょっとした好奇心から廃墟となっていた城に住み着いた時、その圧倒的な快適さに心から驚いたものである。

それが恐らく二年ほど前の出来事。

しばらくそこで生活していたある日、見たことの無い人間が勝手に城へ入ってきた。

バカ公爵：アモンとの最初の出会いである。

始めこそ見知らぬ人間の、しかも男とあって必要以上に警戒したが、アモンはどうにも自分が知る限りの人間の印象とことごとくかけ離れていた。

洞人の自分に対して上からものを言う態度は他の人間たちと変わらなかったが、不思議とそこに悪意の欠片も感じられなかった。

それに、言葉遣いを除けば、亜人の自分に対するアモンの対応は他の人間とは比べ物にならないほど親切だったのも事実である。

城の本来の持ち主ということを盾にして無理やり自分を追い出すでもなく、まるで自分を単なる同居人のように、ごく自然に住まわせ続けてくれた。

そんなある日だった。自分の従者にならないかと提案されたのは。

正直、迷いは大きかった。

洞人の自分が人間に仕えるなど考えもしなかったし、さらに言えば人間にかしずくなど、どうにも不愉快に思えたのも確かだった。

なのに結局、自分はアモンに仕えた。

何故だろう？

人間に媚びへつらつてでも、城の快適な生活を優先したかったからか？

では何故今、自分はここにいる？

そこまでして居たいと思ったなら、今ここにいる自分は何なのだろう？

疑問は空に輝く星の数ほど頭に浮かぶ。

しかし、心のどこかではその理由に気づいていた。

（あのバカ公爵と長く居すぎたからだ…）

テオドルはふいに夜空から目を逸らした。まるで自分の心から目を逸らすように。

落胆と呼び声

城を出てからすでに十日目。

今日もアルセイデスは森の洞穴に潜むテオドールを訪ねていた。

「どうですか、少しは落ち着きました？」

「…まあね」

明らかに答えの内容とは異なる口調でテオドールが答える。

途端、大きく息を吸い込んだところでため息をぎりぎり我慢したアルセイデスだったが、それでも落胆の影の濃い表情だけはごまかせそうに無かった。

「…それじゃあ、また明日も様子を見に来ますんで、どうか体調だけは気をつけてくださいね。もう随分と寒くなってきましたから」
「うん…」

今日も目すら見ずにテオドールが返事を返す。

アルセイデスの胸中もすでにテオドール並みに複雑になっていた。

果たしてアモンにテオドールの居場所を教えなかったのは得策だったのか。

気を廻して行なったつもり自分の行為はもしかしてひどく的外れだったのではないか。

十日間という長い時間をかけても一向に解決に向かわない状況に、アルセイデスは自分にも非があるのではないかと思わずにはいられなくなっていた。

洞穴を出てから、テオドールに聞こえないようにそっと小さなため

息をつく。

自分が万能ではないのはもちろん承知している。とはいえ、ある程度の能力はあると思っていた。いや、思いたかったのかも知れない。

二人のいざこざもなんとか上手く処理できるのではないか。そんな慢心がもしかしたら自分にはあつたかも知れない。

負の感情は伝染する。

すでにアルセイデスも感染者だ。

城に帰れば今度は空腹と孤独、そして大きな喪失感によって暗く落ち込んだアモンが待っている。

アルセイデスはふと城へも森へも来たくなってきたいる自分に気づいて一層悲観した。

洞穴から城へと向ける足が鉛のように重い。

行くも引くも立ち行かず、思わず両手で顔を覆った。

気を張っていないと正直泣きそうだった。

と、その時、

森の向こう…、城のある方角からかすかに人の声が響いてきた。

森と紅葉

声は徐々にこちらへ近づいてきていた。

わずかずつ大きく、明瞭になってゆく声は、明らかに聞き慣れた声だった。

（殿下の声だ…）

そう気づいた時、アルセイデスはにわかに狼狽した。

何故アモンが森に来ているのか？

元々体力の無いアモンは、加えてここ数日間ろくに食事を取っていないせいでさらに弱っている。

もし森へテオドールを探しに来たとするならすでに正気ではない。いくら慣れた森の中とはいえ、弱りきった今の状態で森を探索するなど完全に無茶である。

すると、

ふいに自分の背後に人の気配を感じ、素早く振り返った。

テオドールだ。

知らぬ間に彼女は外から聞こえてくるアモンのかすかな声に気づき、洞穴を出てきていたのである。

洞人の彼女は自分よりも数倍優れた聴覚を持っている。少し考えれば自分が気づく声に彼女が気づかないほうが不思議だと分かったが、動揺した状態でそれを察する余裕はアルセイデスには無かった。

「ちよ、あんた…、まさかバカ公爵に居場所を…」

「ち、違いますよ、私はそんなに口は軽く…」

一瞬、誤解から口論へと発展しそうになった二人の空気を、はつき

りと聞き取れるようになってきたアモンの声が吹き消した。

その声は明らかに泣いていた。

嗚咽をこらえるように搾り出すような力無い声。

まるでしゃくり上げるような声が少しずつ近づく。

ただひたすら一人の名を呼びながら。

「テオドール……」

かすれた声で呼び続ける。

「テオドール……」

二人がアモンの姿を確認できた時、彼がもはや正気を失っていることは明白だった。

ただ、ふらふらと森を歩きながらなお声を止めない。

「テオドール……」

瞬間、アルセイデスは自分の横をテオドールが駆け抜けるのを見た。

アモンに向かって真っ直ぐ。

まるで風のように素早く、樹々の間を縫ってアモンへ近づく。

そして、

まるでテオドールが辿り着くのと合わせたかのように、アモンは膝を折ってその場に倒れた。

「ちょ、ちよっと!」

かろうじてテオドールはアモンの上半身を、両肩を掴む形で支え上げた。

力を失って倒れたはずのアモンの体は異常に軽い。

頬はこけ、目は落ち窪み、唇はかさついて血色も無い。

だが、なお声を止めない。

目の前に…、泣き腫らし、赤く充血したその目の前に当人がいるにも関わらず、空しくも悲しい呼び声を発し続ける。

「テオドール…」

何故か、テオドールは呼吸が乱れた。

突然に胸がつかえたような感覚に襲われ、息が詰まる。

同時に、視界がぼやけた。

が、次の瞬間には視界はすぐに回復した。

頬を伝う涙の感触とともに。

「テオドール…」

「…分かりました…。もう、分かりましたから…」

気づかず、テオドールはアモンと同じく膝を折り、まるで彼を包み込むように抱き締めた。

「…一緒に帰りましょう。そしてゆっくり休んでください。ほんとに…一人じゃ何にも出来ないんですから貴方ときたら…」

アルセイデスは遠巻きに二人の様子を眺めながら、やたら久しぶりに安堵のため息をついた。

「同じつくなら、やっぱりこういうため息が一番ですね…」

独り言のように言いながら、アルセイデスはこれから二人をどうやって城まで運ぶかを思案していた。

常緑の樹の多いこの森にわずかに立つ紅葉した樹々から、奇妙な三人の客人をもてなすように枯葉が風に舞う。

凍てつく冬を前にして、暖かい日が訪れることもある。

それは決して季節外れという意味だけではない。

ベッドとスズタケ

「テオドール、ちょっとした質問をしていいだろうか？」

「はい、なんでしょう」

「私はこの軽い拷問をあとどのくらい受け続けたら許してもらえるのかな？」

「まともに立って歩けるようになったら考えてあげます」

ベッドに半身を起こし、用意されたスズタケのスープを呆然と見つめたままのアモンに、テオドールがそっけなく答える。

テオドールの職場放棄…もしくは家出から、彼女が城に戻って三日が経つ。

アモンは日頃の不摂生に加え、長らくまともな食事を取らなかった、というか取れなかったために完全な栄養失調状態となっており、アルセイデスにテオドールともどもエントに乘せられて城に辿り着いてからも、ほぼ寝たきりのような状態が続いている。

といつても、普段からほとんど寝たきりと表現してもいいほどの不規則な生活を送っていたアモンを思えば、実際は普段とほとんど変わらないと言ってもいい。

「もういい加減、床上げしてもいいと私は思うんだが…」

「そういう台詞は自分の顔見てから言ってください」

スズタケのスープから逃れたい一心のアモンの言葉をテオドールが手鏡ひとつではっさりと両断した。

元々細い顔が、頬のこけた影響でやたら弱々しく見える。とはいえ、

血色は三日前に比べれば随分と回復した。目の下を覆った隈も薄らぎ、蒼白だった顔も、元々色白だったことを考えればだいぶ血が通って見える。

「ちゃんと残さず食べてくださいよ。でないといつまで経ってもこのメニューのままですからね」

諦念か、もしくは観念か、手鏡に映る自分の顔から目を逸らすと、アモンは膝の上に置かれたスズタケのスープをちびちびと口に始める。

ベッドの横でそんな様子を見続けるテオドールは、普段と変わらず愛想の無い無表情な顔をしていたが、不思議と口元にかすかな微笑みが浮かんでいるようにも見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3946x/>

Nympholic amon

2011年11月7日13時01分発行